



リステラス星圏史略
古資料ファイル
1 - 4



『還るべき者』

※ 同性恋愛あり注意 ※
(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

『還るべき者』

『 還るべき者 』

(草稿 & 没原稿)

(草稿 & 没原稿)

第一部・森の心とこゝろ

(没原稿)

『第一部・森のふところ』 (1983年)

[『第一部・森のふところ』 \(1983年\)](#)

2016年6月15日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

第一部・森のふところ

ほの暗い天幕の内部に、垂れ布を派手にはねあげて、まだ幼さの残る少女が走り込んできた。

「おばば、おばば。物語、しておくれ。」

豊かな白髪がそれに応えてそよぐ。奥まった祭壇のある一画で、既に年齢すら定かではない村一の老女が、厳かに居ずまいを正していた。

古い旋律が流れる。その最初の一音から、時の逆光はすでに始まっているのだ。

「それ故に昔語（むかしがたり）を始めよう。古時（いにしえ）、主神この地を遠去りまししより、神血王7代の後、禁忌破り給いて妹なる王女に子を成させし王、有り。」

「それゆえに昔語りを始めよう」。(1983年)

[「それゆえに昔語りを始めよう」。](#)

2016年6月15日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

それゆえに昔語りを始めよう。

そのかみ《水の大陸》に

トゥリアンギアなる富裕な王領ありき。

「主神は妾をお許し給わぬ！」 (1983年)

「主神は妾をお許し給わぬ！」 (1983年)

2016年6月24日 リステラス星圏史略 (創作)

ガタガタと不吉な嵐がトゥリアンギアの公城全体を揺るがしていた。

「おお嫌な雲だこと。早く塔中の戸をたてておしまい。」

宮女長が居丈高に怒鳴る。既に王がこの城にて無体をはたらいてより十月（とつき）。その屈辱に耐えかねて、王の忠実な従兄でもあった王妹夫が自決し果ててからは、七月（ななつき）になる。

今宵、不幸な王族の女性娘は、望みもせぬ罪の報いを、時の定めに従って産まされようとしていた。

「...主神よ！ 主神よ！」

先程からヒステリックな叫びが風の音の合い間をついては響いてきていた。

仮に設けられた産屋よりの、王女の救いを求める叫びである。

陣痛の間隔はいよいよ狭まり、彼女の憎み呪う罪の子によって与えられる苦しみは、殆ど死に値するようにも思われた。いや、いっそのこと本当に安らな逃亡を許されたならばどんなにか幸福に感じた事だろう。

やがて、ひたすらに長い激苦の後で、健康な生命の声が、母親に遺された全ての希望を打ち砕くかに聞かれた。

清められた布にくるまれた我が子を渡されようとした時、哀れな女は一目見て悲鳴をあげて飛びすさった。赤子はあまりに美しく、そして、ひどく似通っているのは彼女の愛した物静かな夫にではなく... 無論、禁忌破りの傍若な現王、実の兄にこそ、生き写しだったのだから。

「主神は妾をお許し給わぬ！」

衝撃のあまり、さし出された怪物をはねのけて高潔な王女は泣き伏した。

侍従に典医達はオロオロし、それでも無理矢理に柔らかい生物を女主人（あるじ）の脇にさし入れて部屋の隅の方、隅の方にと、三々五々はべっていた。...誰が、神の直接の血を受け継ぐ貴婦人でさえ怖れるような、暗い血の生命に触れていたいと思うことだろう。

《ブロン。》

訪（おと）のうた者は名乗った。姿なき姿、音なき音は。

《我は聖なる者。大いなる霊。ブロンと呼ばれし。天地の律を司る者の一柱。》

側づきの者たちは皆怖じ畏れて目を伏せ、顔を見合わせた。ただ奥まった広やかな豪華な寝台（ねだい）の上でだけ、子を生（な）したばかりの尊大な悲劇の王女が、その者を疾（と）くどけよと自らが世に産み出した赤児を指して、激しく泣きたてた。

「ああ、ああ、妾は穢されてしまった！ 生まれてよりこのかた、清浄に神なる姿ばかりを抱き描いてきたのに。妾は何一つ悪なる行いなど為さなかったのに！ ...お怨み申す兄上、お怨み申す国王！ よくもよくもこの妾を愛しなど致されましたな。妾は穢されてしまった。汚辱じゃ！ 汚辱じゃ！

...誰ぞ！ その者を疾く退（ど）けよ！ 罪の子じゃ。禁忌の子じゃ！

ああうるさい泣く声が耳に突き刺さる。

この上に妾にその者の呪詛が乗り移らぬうちに！

誰ぞこの悪魔を妾から遠ざけておくれっ」

命ずる悲鳴は侍女どもの耳を打ったが、誰もブロンなる訪うた者に意識を引きつけられて、動かなかった。

また、典医達も。

だが大いなる悲劇の女は我（われ）一人のみを罪科から救おうとするに忙しく、他者を視る目

を持たなかった。

「ああ、ああ。主なる神よ！ 父神よ！ この者は妾の意志ではござりませぬ、罪は兄なる王のものでございます。」

妾をは罰し給うな。高潔なる女はしわがれた声で必死に祈りふためいた。

その、胸乳もあらわに乱れまく哀れな姿を、声なき声の主、聖なる霊（たましい）の1柱ブロンは、ただその産室に意識を寄せるだけで、冷ややかに眺めていた。

「ええ去れ！ この悪霊の申し子！ 死者の王よ禁忌の生命を疾く連れ去り給え！」

打たれた赤児の声が響いた。途方にくれる父神の敬虔な信者たちは、幼き者の高い寝台から転げ落ちるのを見はしたが、動く事は出来なかった。

《...ヒト族よ》

殷々として声音にはなり得ぬ、深い心の響きが、悠久の時の彼方からのようにゆるゆると物語った。

《ヒト族よ。そなたらが因襲に囚われ、若き真実の生命が視えぬと云うのなら。》

むきだしの孤独な赤児は肉眼には映らぬ光芒に包まれ、安らかにせられた。

《地の働きを司る、聖霊なるわたしがこのみどり子を祝福しよう。

弱き者の求める声が囚われ人の誰にも届かぬのなら、誰もが人の心のシンを視ることを得ぬのなら。この高貴なる無垢の魂の

(没だな～

ミアルドが畏れられたのは
特殊な政治事情があったからで
"罪の子" だったからじゃない。)

[「それゆえに昔語りを始めよう」。](#)

2016年6月15日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

アトル・アン古伝承より

ミトラ＝タ・ヴィアタ

－ 双 生 神 話 －

豪士のむすめアリシアが宮女として城へ上がったのは十六歳の春。適齢期をひかえての箔づけだと誰もが笑って冷やかした。

トゥリアンギアの公領は皇国第二の広さを誇り、京（みやこ）よりも気候の穏やかな北方への要（かなめ）となっている。

石造り、古風な城は小高い丘の上に建ち、その主人たるのはまだ幼いともいえる薄幸の貴公子だった。

この地には"双神"（ミトラアイア）という伝承があり、"完全（まったき）二者は神にも等しい"と謡われている。

律典にもそれが反映され、ひとは婚姻－多くは"家流"制度や利害に左右されやすく、異性同士と定められている－の相手とは別に、生涯ただひとりの"半身"と呼ばれる配偶者－性別に関わりなく、親友とも義兄弟とも訳され、誓約の掟のもとに不壊不反、恋人よりも重いとされる－を持つことが通例となっていた。

責罪に関しても、夫婦・子・兄弟は離縁を申し立てれば免れる場合も多いのに反し、唯一他者（ミトラ・タ）の誓いをたてたものは本人と全く等しく、その係累にまで禍が及ぶところまで同じに行われる。

ために、不義の公子、将来の災厄の予想されている存在には、"他者"（対者）のなり手がいなかった。

秋、アリシアはミアルド公子の侍女となる。

生来慈母神の守護を受ける少女は、幼ない公子に対して母親にも似た愛をもつようになるが、

周圀に危惧され、かつ公子自身の決意によって、郷（さと）に帰されることとなる。

箱馬車の中で泣いて少女はひとり唯一の誓いを立てた。

(ディカールと呼ばれるその少年が) (1983年)

(ディカールと呼ばれるその少年が) (※1983年原稿)

2016年6月15日 リステラス星圏史略 (創作)

ディカールと呼ばれるその少年が父に連れられてトゥリアンギア公領を旅して行ったのは冬も始まるとういう枯雨月(かれうづき)。森の育ちにはただでさえ平原の秋は興味深く覚えるものを、金に銀に華やぐ長草の舞うなかで、ひときわ鮮やかなに彼らを追い越して遠野を駆せる白馬の姿が目を魅いた。

~~「父上、父上」~~

~~一生来おちついた温和しい息子の歓声に驚いた養父が顔をあげる。~~

「父上～！」

身についた温和しさも忘れて養父のもとへと走り寄る。火の仕度をする父親は珍しい歓声にひどく驚いた顔をした。

「あれあの御方はどなたです？ 平野の貴人は馬が巧い！ 父上なら御存知でありましょう」

問われて見遥かせば、折しも陽の傾こうとする金炎の平原に、白銀燃えたつ白馬を乗りこなし少年と同じほどの背の高い童児が行く。

「...はてトゥリアンギアの、黄金の髪をした貴公子といえは」

ディカールと呼ばれるその少年がトゥリアンギア公領を旅して行ったのは冬も近づこう枯雨月(かれうづき)。森の育ちにはただでさえ平原の秋の風情はおもしろく思えるものを、金に銀に、華やぐながし草の舞うなかを、ひときわ鮮やかに遠野を駆せる白馬の姿が目を魅いた。

「父上、父上！」

物静かな性(さが)も忘れたように養父のもとへと走り寄る。火の仕度をする老騎士は珍しい歓声にひどく驚いた顔をした。

「あれを行かれる御方はどなたでしょう。名のある家中に違いない」

(古アトル・アンの地) (1983年)

(古アトル・アンの地) (1983年)

2016年6月15日 リステラス星圏史略 (創作)

古アトル・アンの地、当時はアトランと呼ばれていた世界に、幾百度目かの春が訪うた。

花々は咲きそめ、森は、暖かい北方の地から順々に、生き生きとした緑の色をとりかえす。そんな、営々とした精霊達の穏やかな繰り返しのなか、時を共にしながらなお、

死すべき人族の短やかな生には、騒憂の種が尽きない。

「三親の法については御存知の筈。」

「このあいだ導師に習ったよ。曰く、『三親の法により、第4代青（セイ）の王、罪を犯せし者その処分、三親に及ぶべき事を定む。』 この場合の"三親"の定義とは、親・子・孫もしくは祖父母の直系三代、兄弟と伴侶、その直系と兄弟。そして"最も親しき友"（ミトラ）。

三親の法はもともとは罪を犯そうとする者への心の歯止めとして立法されたものだというけれども、わたしの見るところ、第10代青王ランザン君（ぎみ）の御代（みよ）以来、貴族同士の政争の陰謀の道具としてや、民草の間でも貧しい者をさらに貧しく虐げる目的で、誤用されることが多くなってしまったおうだね」

「結構な御学識ですな、閣下」

ありがとうと答える"閣下"の高く柔らかな少年声が、城のテラスに朗らかに響いた。

ところはアトラン最古の血統を誇る青王国...青は母なる海霊に通じ、また父なるティアスラァル神の血の色でもある...の、随一の公領トゥリアンギアの城。

晩春の恵み豊かな日差しに誘われて、幼い公子と、後見にして実質的な宰領である老ク・スールア伯とは、公子の部屋に続くテラスの一角で昼食を共にしていた。

日課である。

宰伯ク・スールアは煩瑣（はんさ）な執務の多忙をおして、なにをおいてもこの習慣を曲げる

事がなかった。

「今日は...義兄弟 真の友（ミトラ）のことについて、お知りになりたいとの、仰せでしたな」

「ええ、伯」

ク・スールアは翳りのあるくらい瞳を伏せて思案にくれていた。

((どのように...話したらよいものか))

彼がこの不幸な公子の後見を王より言いつかってから早や12大祭（※）にもなる。幼なき頃より御仕え申した現王のたつての頼みゆえに引き受けたというものの、彼にとって、いや王国の他のどの貴族だったとしたところで、この立場は決して有り難いものではなかった。

その上に公子は類稀な程に美しく、成長につれ、驚くばかりの知性を、聰明さを、表すようになっていったのである。

不安はいや増した。

2重、3重に神の裔（すえ）なる王族の血を継いでいるとあれば、それも道理。仕方のない事ではあったが...

王の庶子、それも王と王妹との不義によってなされた公子などの存在は、優秀であればあるほどに"神孫の青王国"のためにはならない。

他国生まれの魔女王妃・皇太子母は、今や王国の実権の半ばを握り、絶えず公子の身边に目を光らせているという噂だった。

公子の命はどちらにせよ長くはあるまい。

その時、どれだけの変動がこの国に起こり得るか。

ク・スールアは茶を飲みほし、背筋正しく待っている公子へ、儀礼どおり目を伏せたまま話しはじめた。

「先人、聖賢デュアザンの残せし言葉のひとつにこう御在ますな。

ミトラなるもの、言葉にて教えることあたわず、語ることあたわず。ただ掟の相手（ミトラ・タ）と呼ぶべき友を実際に得る事によりてのみ、自ら体得すべしと。それ以来、あらゆる賢者

・学者も、ミトラについて一切触れも述べもしませぬそうな。それ故にミトラの掟に関わる正確な定義も、刑罰の取り決めも、この青王国には存在しませぬのじゃ... ふむ。公式には、ですがな」

(※「12大祭」：1大祭 = 1年。年越しの祭のこと。)

2006年6月26日 [連載（2周目!・上古神代～水の大陸）](#) [コメント \(1\)](#)

「今日は、わたしの方から尋ねたいことがあるのだが、構わないかしら。」

稚い領主主人あるじからこう切り出された時、~~（ディゼンドラ）~~は、その内容について、深く予測することもなく、応諾の返事をしてしまっていた。

「よかった。何人かに尋いたのだが、だれも話をそらしたがつてしまって、満足のいく答えを与えてくれないのだ……ミトラのそとなのについて、なのだが。」

老練な男の表情がさっと揺ぎ、質問者である公子は、やはり、答えてはもらえないのだろうかと、疑念するように第一の家令の顔を遠慮がちにのぞきこんで待っていた。

……そこは、王国随一のトゥリアンギアの公領の、公子の居間につづく南面の、中庭のように高い壁によって囲われた、テラスの一画だった。

「今日はわたしの方から尋ねたい事があるのだが」 (1983年)

「今日はわたしの方から尋ねたい事があるのだが」 (1983年)

2016年6月15日 リステラス星圏史略 (創作)

「今日はわたしの方から尋ねたい事があるのだが、構わないかしら、伯？」

「何なりと、閣下」

「よかった。」

稚い主人(あるじ)からそう切り出された時、ク・スーリア伯爵はその内容について深く予測する事もなく応諾の返事をしてしまっていた。

それがどれだけ重い言葉であるかの分別くらい、ついていても良さそうなものなのに、である。

だがそれでも閣下と呼ばれた子供は遠慮がちに尋ねた。他者(ひと)の弱味を握ろうとするのは卑怯な行いであると教えられて育ったからである。

「何人かに既に尋ねてみたのだが、誰も話をそらしたがってしまうようで、満足のいく答えを与えてくれないのだ... "ミトラ" についてなのだが」

ひとつの単語に触れられて、老練な伯の表情がさっと揺らいだ。質問者である公子は、やはり教えては貰えぬ事柄の一つだったのだろうか、顔を曇らせて、懸念するように第一の家令の反応を待っていた。

...そこは、王国随一の公領トゥリアンギアの、管領である公子の居間に続く、中庭風に高い石垣によって囲われた南面のテラスの一画だった。

暖かい夏の午前の日差しが豊かに差し込み、石の床の上に緑の蔦の陰を踊らせている。

そのテラスに据え付けの大きな一枚岩のテーブルに場所を選んで、まだ幼ささえ残る公子と、彼の後見であり現在のところ実質的なトゥリアンギアの采配を預かっているク・スーリア伯とは、日課の学問を始める所だった。

学問と言っても伯爵の管轄は天文（うらない）や神話学、地理学や器楽・武術といった方面のものではない。それらには無論一流の学者や指南役達がついて、公子の優れた才能を可能な限り伸ばそうと、日々努めていた。

そうではなく、多忙な身の伯が毎日必ず執務の時間を割いて、年若い主人に教えこもうとしていたもの...それは、他者を愛すること、民草を思い遣らねばならないこと、王家の一員たるもの常に身を孤高に持し、全て物事を公平に多面的に見降ろして判断を下すべき事...等々、今日で言う帝王学の前身にも当たるものであった。

老いた伯爵自身はこれを『人道』という言葉で端的に表していた。

彼はしばしばこのように公子に教えたものである。

「良ろしいですか閣下...このように行うのが人として生きるべき道というもので御在ますぞ。まして閣下には人々の上に立つ貴い血族の御生まれなのですからな」

しかしク・スールアはこの不遇な王の庶子の背負うだろう未来を正しく予見していたのである。彼はその守り役をも務めた現王のたつての願いによってトゥリアンギアの名目上の公子を預かってはいたが、その御子が王位を得る事は決してないだろうこと、どころか、成人する以前には公太母である現王妃によってその美しい命を奪われてしまうだろうという想定された事実を、王国の他の全ての民と同じようによくわきまえていた。

にも関わらず、いや、だからこそ、伯は王道を、王者としての生き様を、公子に教えようとしたのである。

悲運な公子が自らの命運をいたずらに嘆くことなく、恨むことなく、真直に生きて逝く為には、それが...王家の一員としての自覚が...必要不可欠のものである事を、彼は言葉に出来るでもなく漠然と了解していた。

公子は死ななければならない、実父である現王のありとあらゆる願いと努力にも関わらず。

王の庶子というもの、その資質が優れたものである程に、その存在は王国の存続に危機をもたらすのである。

「...伯...?」

黙りこんでしまった後見者の表情を不安げに、しかし辛抱強く公子はのぞき込んで待っていた

。「ミトラ ... の誓い、で御在ますか...」

老伯は重々しく呟くと、一体どのように説明するべきか、いつの昔からかこの国の人々の、神々の物語や多くの古伝説への信奉にも伍して重要なバツクボーンつたえがたりとなった思想について、考えをめぐらせ始めた。

...とても端的に言葉で教えられるものではあり得ない。

彼自身もまた、一般に識られている程度にしか、漠然と了解しているに過ぎないのだ。

そもそも『ミトラ』というその語が何処から、誰によってもたらされたのかさえ、彼は知らないのではないのか？

「"ミトラ"について、これまで文字によって示されたものは、かつての聖賢、ディードラスの、ごくごく消極的な定義しか存在しない事は、御存知ですな」

「知っている。彼によればミトラの誓いとは、"主従でなく、伴侶でなく、友恋の情でなく。それら全てを含みそれら全てを超ゆ。ミトラの誓いを樹つる者はその相手に対し全ての誠実を尽すべし。自らの掟を破る時、世界と共に滅びるねし。" ...判るような気もしてよく考えてみたのだが...結局さっぱり解らない。」

「その通りで御在ましょう。本来言葉を介して了解すべきものではなく、実感を通して体得する感覚なのだ、と」

s e c t . 1 モチーフ I .

そこでまだ幼さの面影の残る利発な公子は尋ねた。

「それでは、おまえもわたしの "血縁以外の身内" (ミトラ・タ) とはみなされないのか、タイン伯？」

トゥリアンギアの実質的な宰領・タインジェント伯爵は、多忙な職務の合間に、しばしば直々に教育官の役を買って出ている程に、主人でもある少年の優秀さを愛でていたにも関らず、深い悲しみのような、痛ましさと自責のような、みじめな表情をかすかに浮かべて上体をひいた。

「お許しを、閣下。今までの所わたくしは閣下を守(も)り育てよとの王陛下の御命令(おいつけ)以上の事は為しておりませぬし、また、今後も為すわけには決していきませなんだ。この限りではわたくしは閣下(あなたさま)と心を結んだ事には成り得ませぬで。如何にわたくしが閣下のお身上に御同情申し上げたとしても、ミトラ・タの誓いをたてるわけには... わたくしには妻も子も親兄弟も御在ます。家長は一族の者を守らねばいかんのです。」

「そうか...」

王の血筋、生まれた時からのトゥリアンギア公主という肩書を持つ少年は、判っていた、というように少し弱々しく微笑した。

「そんなに自分を責めるような顔をしないでくれないか。昔から、わたしはいつも、伯のその顔の理由(わけ)を不思議に思っていたものだけれど... わたしももう12の大祭を過ぎた。自分の立場も血筋の意味も理解できるようになったよ。」

「ミトラにはなれないにしても、やはりわたしを教え育ててくれた伯の存在は... ええと... その... わたしには、貴重、いや、重要なんだ。... なにかわたしが伯のためにできることはないのかしら？ たとえば... わたしの身に、なにかが起こった時、決して伯に累が及ばずにすませられる方法のような？」

タインジェント伯は打たれたように痛々しい声で言った。

「閣下...おわかりでしょう。そのように個人的に気を使っていただいたりしない事が、最善の策だということは？ わたくしは王妃陛下のお庭番を恐れているのです。」

茶菓の給仕の当番にあっていた少女のような若い低位の官女は、そこまでを同僚の台所女たちに語り終えてしまうと、おろおろと泣き始めた。

「おかわいそうだわ。おかわいそうだわ。まだまだあんなに子供こどもしていらっしやるのに、あんな... あんな風に無理にお気を使いになって、心の中ではどんなにかお寂しく感じていらっしやる事でしょうに...」

「幼なくいらっしても王家のお方だからね。」

年の寄った炉火番の女が肯いた。

「いつでも先にわたしら臣下の者達の事を気遣って下さる。あの御気性は今の陛下よりも先代様に似ておいでだよ... ま、血筋の濃さを考えてみれば当然のことかも知れないがねエ」

老婆がひとり首をふっているのへ、「しっ！ めったな事をお云いでないよ」と、いま1人の女が口を出した。

「あんたはあたいの"友人"（ミトラ）って事に一応なってるんだからねえ。ぼけて来たからといって不用心な事をくっちゃべるのはよしとくれ。」

「さあさあ、あんたもだよ新米采女さん。あんたも親ご兄弟が大事なら... 公子様に親身になってさしあげようなんざ、考えないこった。」

「閣下、お許しを乞いに参りました。」（1983年）

「閣下、お許しを乞いに参りました。」（1983年）

2016年6月16日 リステラス星圏史略（創作）

「閣下、お許しを乞いに参りました。」

「候？どうしたのだ」

「閣下お気に入りのあの娘、ヤタル家の、アルシアと申しましたか。些細な不始末を理由に、本日、宿下がりを申し付けました。既に城を出させて御在ます。」

「アルシアを！」

年若い公子は椅子を蹴り、走り出すかのように見え...

やがて、遠くを視ようとする目つきで、静かに腰を下ろした。

「有り難う。候。」

「閣下。」

「わたしからそれをしようと思っていた。言い出せずにいた。ズルズルと日のべをするというのは、潔くない真似だな。わたしは恥じるべきだ。」

「閣下。」

「不義のとは云い条、それでもわたしは正しく神王の血を継ぐ者なのだ。違うか？」

一瞬、公子の背筋はひどく誇りやかに伸ばされ、白い額には自負と信念とが満ちた。だがしかし、雲間からのぞく太陽が直ぐに復た姿を隠してしまうように、輝きは表情から去り、ひどく青冷めて公子は震え始めた。

「閣下。」

「1人にしておくれ。候。」

静かな絶望の涙をなおも隠そうとしながら、

「ここはひどく寒いのだ。どうせ、誰もわたしに触れる事が出来ないのなら。

...孤独（ひとり）に、しておいてくれ。」

南に下って色の白い娘は、肌に慣染んだ重い衣服をつけた。悲嘆にくれる愛娘の様子に、父も母も、一族の他の者も、誰もその送り帰されて来た罪条を尋ねようとはしなかった。どのみちそれ以上のお咎めは無く、むしろ何事かに『巻き込まれた』だけ、望むならば一族から誰か他の者を、宮女または近衛士として受け入れようとまでの、同情と犒（ねぎら）いの伝奏をク・スールア候直々から届けられていたのだ。

涙の涸れるまで泣き果てて、痩せて小柄な未だ少女とさえ呼べる若い貴女は、決然として面をあげた。

「公子様はまだ14祭礼よ。」（※）

整えられた部屋の中で南国の涼やかな風がさやさや鳴った。

「行ってくれるわね？ リージア。

行ってくれるわね。お願いよ...」

「ええ。義姉者（あねじゃ）。あなたが望むのなら。」

(モチーフ I-II) (1983年)

(モチーフ I-II) (1983年)

2016年6月16日 リステラス星圏史略 (創作)

(モチーフ I-II)

「どうしたのだ」

公子が馬を寄せて行ってみると、人垣が割れて騒ぎの中心が見えた。

「これは閣下！ 見苦しい騒ぎをお見せいたしまして...」

「かしこまらなくてもよいよ、隊長。何の騒ぎなのだ？」

「いえ、閣下、小官はただの士卒長でございますが...何のと申ませばこの男、この、ここに捕えてござります罪人がでございますが、アセドの魔薬に関わっているのを昨夜おそくにつきとめましてございます」

「アセドの魔薬に？」

「はい。で、御在ますので第8代タンプゲイルト故王の定めましたる三身の法に従いてこの者の妻・親族をも引ったてようここにこうして参りますれば、この者、大罪人の分際をして、女とは離縁した、既に離縁した者をまで累につかせようとするのは非法であろう、などとぬかしおりまして... まったく縛めを受ける分際で見の程知らずもはなはだしいへ理屈...」

「なるほど。」

公子は官吏の言葉をさえぎって、純白の若馬を民草の遠巻きに見まもる中、更に数歩すすめ、馬上から罪人にかがみこんだ。

「男。名はなんと？」

「タンデでごぜえますだ領主さま」

縛められた姿で、出来る限りの礼を尽くそうと努力しながら罪人は大人しく名乗った。

「タンデ、何故アセドの魔薬になど手を出した？」

「金が欲しかったからでごぜえます領主さま」

「...おまえは貧乏をしているのか」

「へえ。いえ。」

「どちらだ」

「急に... たくさんの金が要りようになったんで、領主さま」

「なぜ？」

従順な罪人は困ったように口をつぐんでしまい、答えようとしなかった。公子は体を起こして村人達に、誰か理由を知る者はいないのか、と、豊かな落ちついた声で呼ばわった。

「あたしが...」

「てめえはすっこんでろこの女（アマ）！」

唐突にわざとらしいあざとげな声で男は叫んだ。

公子は首をめぐらせて、怒声にも怯えずに役人達のかげから歩み出て来ようとする、痩せて蒼白な顔の女を見つめた。

「おまえは？」

「これがその者の女房でございます」

士卒長が説明した。

「タンデ・タ。おまえは夫が金を必要とした訳を、知っているのか？」

「へえ。領主さま」

なまりの強い農婦ことばのかげで、にも関わらず、城づとめのどんな貴婦人や官女達にも負けずしゃきりと女が首すじを持たげている様を、公子は注意深く観察し、尋ねた。

「おまえのためなのか？」

「へえ。よくおわかりで...」

「違えますだ領主さま！ おらァ遊ぶ金欲しさにやったんで！ そんな女とは何の関わりもねえんで！」

「おまえは黙ってるんだっ！」

「士卒長、乱暴はするな」

(サムサラ地方出身のその若い騎士) (1983年)

(サムサラ地方出身のその若い騎士) (1983年)

2016年6月16日 リステラス星圏史略 (創作)

サムサラ地方出身のその若い騎士(デュアレスト・ダム=サムサーラ)が、これから自分の主となるべき貴人の名を聞かされた時、彼の胸には望外な喜びと光栄を感じる心が一杯に満たされた。それ故に彼が...式に向かうあいだじゅう、その頬が幸福に生き生きと輝きっぱなしだったというのは、彼・ディカールにしてみれば当然至極のことであったのだ。

しかしそれが彼をしていかに周囲の他の勲爵士(デュアレスト)から際立たせて見せた事か。それは、彼の新しい主人の視線が式典が初められて直ぐに式場のある一点、彼の占めている座席に注がれたまま動かなくなってしまった事実からも明らかだった。

サムサラの若き騎士ディカール(ディカール・デュアレスト・ダム=サムサーラ)の、主人となり、彼の全てを握る権利を得た者の名を、トゥリアンギア領主ミアルドという。

この未だ年若い公子の尊称は本来もっと長く、より輝かしくなるべきであるか、さもなくば、名の持ち主と共に初めからこの世に存在してはならぬかの、どちらかであった。

つまりこうである。

彼の母は現王の異母妹であり、その公(おおやけ)の夫は王の従兄であった。しかし彼の実父は現王その人なのだという事は、3歳の童児でも知らぬはないという"秘密"である。

そして現王の正妃には彼と幾らも齡の違わぬ、体の弱い弟がいるという事も。

現王は既にして高齢であった。そしてこの公子の麾下に毎年配属されて来る若騎士の殆どが、トゥリアンギア...王国随一の公領の守りにつける事を誇りにしながらも、王位継承第一位にしていつ何時、反逆者として現王妃から追われるやも知れぬ主を持ってしまった事への不安で、複雑な面持ちをして...式に臨むのが常の事となっていた。

そのような事情があったからこそ若いディカールの姿、その、喜びと忠誠のみに満ち溢れた態度は式典の主催者の眼をかくみ魅きつけたのである。公子は、自分の微妙な立場というものを、平静な表情に隠された下で常に十二分に自覚させられ続けていたのだから。

役人が、その年トゥリアンギアに配された数百名の若騎士たちの部署決定を読みあげている間に、ディカールはその視線に気がついて顔を上げたのだった。それまでは興奮していて解らなかつたのだ。

忠実に、見習い騎士の時代に受けた修行のままに跪（ひざまず）いていた姿勢から彼が顔を上げると、はるか遠く離れた壇上から、今日より自分の主となった人、敬愛すべき唯一無二の御方が、他ならぬ自分自身を注視しておられるのに気づいたのだった。

ディカールは田舎士族の出で謙虚な若騎士らしい教育が良く身に染み通っている青年であったから、自分の何が他の者より秀でていて、それで主人の目にとまったのではないか、などという奢った考えは数瞬の間とて保たなかつた。

次いで彼は単に輝かしき公子は漠然とこちらの方を向いているだけなのか、さもなくば周囲にいる自分より優れた騎士たちの誰か...沢山いた、彼の考えでは...を見分しているのだろうと考え、その素晴らしい光栄に浴し得た者は誰なのかが知りたくて再び公子の尊顔を盗み見た。

けれど主人の端正な眼差しは依然として彼に向けられ続けているようにしか思えず...

彼はそのゆるやかに波打つ淡い黄金の髪を、秀麗な白い額を、以前にも見た事があつた。

士族の息子として騎士道修行所へと父と旅をしていた折に、ディカールは、野を駆ける、さながら精霊族のごとき美しさを持つ年若い貴公子を、遠目ながら拝した事があつたのだ。

見事な白亜の駿馬であり、それ以上に見事な美しい乗り手であつた！

共にそれを讃えあつた同行の父も今は亡いが、その日以来、馬を駆るなら彼の御方のように、人に仕えるなら彼の御方のような貴人に、というのが、苦しい修業時代をやり抜かせた彼の情熱の、ひそかな支えでさえあつたものえある。

今日この日にその憧憬の貴公子のもとに主従の関係を結ぶ事が出来て、これ以上の僥倖というものは彼には無いのだった。

幸福に酔うあまり、自分が下級の若騎士の分際でありながら主人の目を真っ直ぐに見返す、などというとんでもない無作法を犯しているのにディカールが気がついたのは、公子が穏やかに彼に笑いかけたその後の事だつた。

彼は耳もとまで恥の感情で真紅に染め、果たして主人が自分を見つめていたのは初めて着る騎

士の装束に何かおかしい所があったためではなかろうかと、身動きのままならぬ式典の最中に見える限りの自分の姿に目を走らせながら真剣に悩んだ。

あまつさえ自分は主の目を見返すような馬鹿な真似をしてしまった！

さあ、これが為に晴れの式のその日のうちに主従を解かれるような事になってしまうのではないか。

彼はその日一日中を追われた野兎のようにビクビクして過ごし、事実、歓迎の宴の席での無礼を理由にその日のうちに城を出されてしまう不運な兵士も、毎年1人や2人は必ずいるものなのだが... 少なくとも今年は彼は無事だった。

翌日には彼は他の数人と共に任地イズルンの森へと出立し、新しい生活に慣れる為の忙しさに紛れて、主命による解雇の危惧も、そして崇敬する主人と直接に目を見交わした幸福な数瞬の事をも、徐々に記憶の隅へと押しやり、忘れてしまった。

そうでなくとも見習いから登位したばかりの若騎士の生活になぞ、勤めを解かれてしまう機会が気を抜けば度々あったのである。

けれど孤独に守られた公子には春の陽差しのような明るさの青年は深い印象を与えた。

彼は生まれて初めて彼の目を見返した者の顔を、決して忘れたりしなかったのである。

第一章・森の砦

トゥリアンギア公領のイズルン出城は、広大なイズルンの森の南境を少し入った所にあった。この、穏やかな緑と豊かな水量の幾つかの流れに囲まれた領境警備の一拠点は、静か過ぎるが故に街育ちで配属されてきた若者たちを多いに嘆かせ、辺境の田舎のと言わせしめたが、深い森の心部を迂回する道をたどらずに、直截に突っ切って20日も歩けば、暖かい北方のサムサラ家領である。森の国育ちのディカールだけはこの任地を心から喜んでいるのだった。

今年の若騎士達が配任されて短い初夏があわただしく過ぎ、平地では農作業が、森林では通常の狩猟と、禁制の王獣タイワモの密猟者狩とが、忙しくなる頃。

イズルンの森の砦では何か奇妙な噂がそれとなくささやかれていた。

森の中を1人で出歩く者は若い貴公子の幻を見るのだという。その幻の姿は、今はもう存(い)ない古(いにしえ)の精霊族のようだとも、かつてこの森で命を落とした伝説の一英雄そのものだとも言い、常に仮面をつけたままで遠くから、1人歩きの若い騎士の事を、じっと探るように見るのだと伝えられた。

そうして、その幻に誰かしらが出喰す時には、必ずや砦の直ぐ外で、真昼のフクロウの鳴く声が聞かれるのだ...

ある日、ディカールが職務の合い間の短い休憩を安らっていると、砦の壁のすぐ外側で、その声が聞かれた。

好奇心にかられて若騎士は砦を抜け出したのだった。足の向くままに木々の間をさ迷い、小鳥達の声聞き、もう大分遠くにまで来てしまった、そろそろ戻らなければ次の張り番に遅れてしまうだろうと彼が考え初めた折...

小道からそれた彼方の樹下の薄暗がりから、問題の幻が、姿を現した。

下枝の間から透かし見ようとするその灰緑色の瞳を、たとえ厚い布の仮面で表情を覆ってしまっているからといって、ディカールにどうして見違えるなどという事が出来ただろうか。

白い服装の貴公子は彼を認めると、ついて来いというような仕草をしたが、そうされる前から若騎士は無意識のうちに足を踏み出していた。

小道から外れた森の空き地に白い、またとはないだろう見事な馬が、つながれもせず大人しく主人を待って草をはんでいた。

「よく来た。」

それ故にディカールは、幻の貴公子が無造作に仮面を外し、後ろに束ねた白金の髪を解くのを見ても、一切驚く事がなかった。

ただ、何故かしらそのような時の訪れるのをずっと以前から待ちわびていたかのような、不思議な感覚に襲われて、静かに膝をつき、頭（こうべ）を垂れたのだった。

「恐れながら閣下にはこのような辺境へ、供の者もお連れになりませず、御自身の危険にお気づきではいられないのでありましょうか」

若い貴公子は他ならぬディカールの主人、トゥリアンギアの公子ミアルドであったのだが、家臣の敬々しい口調ではあるが唐突でぶしつけでさえある言葉を聞くと、満足したかのように笑みを浮かべた。

「ではおまえはわたしの立場に関して、まるで無知というわけでもないらしいな！」

「閣下、閣下が何故（なにゆえ）にこのような辺境の森を散策されるのかは私（わたくし）ごとき者の存じ上げる所では御在ませんが、閣下がしばしば奈辺のものとも知れぬ刺客に襲われておいでなのは誰もが耳にする事ではございませんか。その度に閣下の御立場を案じる者達は心を痛めております。

どうか、閣下、今だけなりとも私を護衛としてお召し下さいませ」

「わたしの立場を案じる者...か！ 案じているのは家臣としての己れの行く末だろうよ。

だが、若騎士（ディアレスト）よ、おまえがわたしの散策の故（ゆえ）を知らないなどという訳があるのか。わたしはこの二月（ふたつき）というもの、他ならぬおまえを探しあぐねてイズルンの地をさ迷っていたというのに？」

「...私を？」

理解ししかねる言葉にディカールは戸惑い、思わず頭（こうべ）を上げて貴人の面（おもて）を直ぐに見返すという非礼を犯した挙句、儀式の際の出来事を思い起こして大いにうろたえた。

「...あ、あの折は御無礼仕りました!!」

ただただ恥じ入るのみである。若騎士としての修業の出来を疑われても仕方のない、その場で騎士位を取り上げられてしかるべき無作法であったのだから。

「ばかな。」

貴公子は朗らかに笑い飛ばして臣下の畏れを中断させた。

「そのような事、罰する為に領主たるわたしが時間を費やすと思うのか？デュアレスト。それにわたしの目を見返す事の出来た者などおまえが初めてだ...謝ることはない。わたしは、喜んでいるのだから」

「 ? 閣下、私には...」

「解らなかりうな」

「はい。」

ディカールは混乱した頭を抱えたい気持ちで素直に肯いた。

「おまえは、若騎士（デュアレスト）よ、サムサラ家人（ダム＝サムサーラ）だね。それとも、その隣領（ダム・クアラルンラ）の者か？」

「サムサラの末子でございます、閣下。私はディカール・デュアレスト・ダム＝サムサーラと申し上げます」

「そうか。」

年若い貴公子は満足と照れ臭さの入り混じった笑顔を浮かべたが、再び臣下として忠実に面を伏せているディカールには、その、不思議に淋しがり屋の幼な児のような純心さの残る微笑を、目にする機会があろう筈もなかった。

「わたしに当て推量も満更ではないのだな。おまえの人相と任地を聞くときの表情の動きから、北の森の国出身の、イズルンに配された者とまでは判ったのだが、さて調べてみると、これに当てはまる者が7人もいたのには困った。」

上機嫌で続けようとする公子は、不意に口を切って途惑ったように、足下に跪づく者を見下ろした。

「ディカール・デュアレスト。顔を上げてくれないか。話しづらい。」

「は？ ですが閣下...」

成りたて2ヶ月のたかが若騎士に過ぎない彼は、先程からの彼の輝かしい主人の言動を、完全に理解しかねているのだった。

そもそも、領主たる御方が、身分低い家臣にこのように親しげに口を開くものだろうか。否。

直接に会話する事さえ許さない、トゥリアンギア公などよりはるかに位のおとる尊大な貴族達をディカールは修業時代の頃から見慣れていたので、それが当たり前でもあった。

加えて主人は2ヶ月かけて彼を探したと言い、百数十のオーダーにのぼる着任リストをわざわざ手ずから調べたのだと言う。

御自らが。調べさせたのではなく。

自身の謙虚さの故に困惑しながらも、ディカールは、未だ言葉にはならぬものの、その答は既に得ている筈だというようにも、何処かで確信せざるを得ないのだった。

それが何であるかも自分では判らないのだったが。

「恐れながら、閣下」

彼はおずおずと切りだした。

「私を御探しになられたというその理由をお尋ねする事をお許し戴けますでしょうか」

「それを説明しようとしていたのだ、わたしは。...顔をお上げ、我が下級騎士（デュアレスト）よ。わたしの目を見てみせてくれ」

そのような無礼を、と跪づく者はためらった。身分高き貴者への殆ど侮辱にも等しい行為を、しかも敬愛する主人に対して故意に？

「閣下... 私には... 」

「おまえにも命令しなければならないのか？」

その言葉の奇妙さが、それにも増してそれを口にした折の領主の微妙な苦悩にも似た声の調子が、はっと何やら若騎士のと胸を突き、彼に勇気を震い起こさせた。

「.....御無礼を、」

畏る畏る彼は顔を上げて主人の美しく力強い、己れに注がれている瞳を覗きかえした。

が、恐れと畏敬とが心を占めていられたのはほんの一瞬間のことで、直ぐに若いディカールは全てを忘れ我を失って、淡い光を放つ美しい灰緑色の中に、魅入られたように捕えられているのだった。

「ディカールよ。」

殆ど幸福というに近い感動のこめられた声で輝かしい公子は語った。

「わたしがおまえを探し求めたというのは、全ておまえのその眼の故なのだ。わたしは20もの大祭礼を王の忌み児たるトゥリアンギアの司として生きてきて、ついぞわたしの目を真っ直ぐに見返す者になど出会った事はなかった。

皆、わたしの立場を扱いかねて視線をそらし、心の内にあるものを隠してしまおうとするのだ
...

血をわけた実の父君であられる筈の、王陛下でさえそうだった。

母君は御存命のうちから、わたしの姿に遠目に触れる事さえ厭われたそうだ。
誇り高い、信仰のあつい方であったようだから」

「閣下、それは...」

無論ディカールはそういった残酷な噂は全て知ってはいた。だが、まさかそのような下賤で悪辣な物語が公子御自らの耳にまで届けられていたなどとは、誰が考えよう。

それも随分な昔から、御幼少の折からの既知の事実であつたらしい話ぶりに、忠実な騎士の胸

は手ひどく痛めつけられて覚えず顔を伏せた。

それは、無責任な、おそらくは公子の側仕え達への悲憤であり、また理屈抜きの非常な哀しみと、恐れながらも孤独な育ち方をしたであろう幼なかりし頃の主人への痛ましさの情...

そういった入りまじった感情であったのだが、輝かしき公子自身は彼のそんな錯綜など気にかける様子もなく、優雅な気高い仕草でその場の草地に直に腰をおろそうとした。

ディカールは公子の服の貴重にして神聖なる白が草の汁に汚されるのを恐れ、慌てて自分の肩布を外して主人の下に敷きのべた。

「ありがとう。おまえももう跪礼をおやめ。わたしも昔練習した事があるが、それは疲れるものだ。話をするには向かない。

ところでわたしの生い立ちについてなど、おまえがそう驚くことはないのだよ... 話を続けよう。跪礼はお止めと言っているのに。」

若騎士はしかたなく礼を崩し、半歩下がった位置で跪礼より少しは楽な待機の姿勢をとった。

「律儀なデュアレストなのだな」

公子の言葉にはわずかに悲しげな翳がおちていた。

2016年6月17日 リステラス星圏史略 (創作)

「わたしを真向から見返すおまえの姿を視た時、だから、どんなにかわたしが驚き、かつ狂喜し幸福に感じたことか、説明しようとしてもおまえには解るまい。わたしは幸福だったのだよ、ディカール・デュアレスト」

「はい閣下」

「おまえはわたしに忠誠を誓えるかい？」

若騎士は途惑った。

「閣下、閣下は私の剣が既にトゥリアンギア公子に捧げられたものである事を御存知でおられる筈ですが」

「... 違うのだが。まあよい。」

微笑みの中の翳を見、感じて、ディカールは希まれた答えを返す事のできなかった自分を内心でひどく恥じた。

「ともあれおまえはわたしの目を見返し、わたしはおまえの心を視た。邪心の無い、一途な、情熱的な心だ。そうしておまえはわたしを見ていた、おまえの言うトゥリアンギア公子を、ではなく。

おそらくおまえは若騎士としての義務任期が明けたからと言って、次なる他領への...たとえそれがおまえの故郷へだろうと、転任を急いだりはすまい。

それとも、そう考えたいと願ってしまうのはわたしの独善（ひとりよがり）だろうか？」

「閣下、ですがトゥリアンギアは王国一の公領でございます。何故に他領を望んだりせねばならぬのか、私には判りかねます...」

「だがそうなのだよ。それが武官司（ぶかんつかさ）をして毎年頭を抱えさせる最大の原因なのだ。おまえもイズルン森などに配属されたからには気がついていよう、我が領に、いかに若騎

士と上級の武官ばかりが多くて、中間の年季の入った武者階級が足りていない事か。

余程の出世の望みを持たない限り、皆こぞもっとも安定した主人のいる地へと流れて行ってしまおう。

...ディカール、おまえは海（はは）を見た事があるかい？」

「 ? はい閣下。私の居ました修行所の側に、小さいながらもなかなかの賑わいぶりを見せる商港（あきないみなど）が御在りましたが」

「わたしは未だ見た事が無い。船トルクは己れの船が沈むのを予感して先に全て逃げ出してしまおうものだと人に聞くが、本当か」

「はい。それは面妖な程に適確に察知しては、群をなして船綱を伝い下りて参ります。逆にそのトルク達を見た人間の方が、乗り込み証を取り消せと船主にかけ合いに押しかけたり致します。」

「つまりはそういうことだ。」

途方にくれてディカールは己が主人を見つめた。

この、常人ならぬ輝かしく美しい姿をし、あり余る天分に恵まれて生まれついたであろう事は傍目にも明らかな...さすがは王陛下の血を継がれる方だけの事はある！...生粋な貴人をして、そのように言わしめるような境涯におかれるとは、彼の信奉する偉大なる存在は何を考えておいでなのだろう？

一瞬間、彼は彼の故郷に伝わる普遍なる他者の善心を疑い、更にひどい事には生まれて初めて、崇高者の存在そのものをも、否定したく感じた。

ディカール・ダム＝サムサーラの心にとってその特別な信仰は常に篤く、耐雪なものであったはずなのだが、にも関わらず、今目前にいる敬愛する主人の静かな哀しみと孤独な微笑みの為だけに、それを与えたもうた、または救い給わなかった崇高者・律（リツ）の存在を、彼は承認し難く思わざるを得なかったのである。

その考えは彼の躰られた良心を鋭く刺し、彼は恐れおののいて瞬時のうちに忘れ去ろうと試みたのだが、疑問は、その後長く彼の奥深い心と共にあり、しばしば平安を失わせたのだった。

「そのような顔をするな。」

公子は淡い金髪に指をからませながら穏やかに笑った。

「わたしまでが自分に同情したくなるような、そんな眼をおまえはしているぞ」

「お許しを、」

「ああ、よい。それにしてもわたしは物事を楽観視し過ぎるようだな、おまえが育ちのいい若騎士（デュアレスト）だろうという事を考えに入れていなかったとは。...そんなに恐れなくても良いのだと、直ぐには言っても無理なのだろう」

「閣下？」

「おまえは友人を持っているか？ ディカールよ。良い友の存在というものは何にも増してその者の成長を助け、またその人柄を裏付けるものだ」と騎士道教書には言うが」

「は、私のような者にでも、普通にできる程度にはいるのではと、考えますが」

「良い者達なのだろうな。ディカール、友とはどんなものだ？」

再び若騎士は下問の意図を把み損ねてうろたえ、主人を苦笑させた。

「やはり奇妙な質問か？ だが、そうなのだよ、驚いた事にわたしは友のなんたるかを知らずに育ってしまったのだ。こえは人として非常な欠陥だとは思えないか」

「畏れながら閣下には騎士頭ディアンザ殿を始め、多勢の...」

「彼らはわたしの命令には全て従う。わたしに良かれと思う事は全て率先してやってくれはするが、わたしに意見はしない。決して逆らわない。」

公子はディカールの言葉を遮ると早口に言い切った。

「幼ない頃には姿をやつして民達の中に混ざった事がある。そこでわたしは村の加治屋や居酒屋のおかみなどと友達になれたように感じていたのだが、一度正体がばれてしまうと皆必死になって非礼を詫び始めたよ。...友とはそうしたものか？」

「いいえ。いいえ、閣下！」

激しく否定し、語ろうとして彼は言葉の限界にいき悩んだ。"友" や友情といったもの、口に出して説明しようにはあまりにも複雑微妙にすぎ、かといってそれを知らぬという不幸な主人に伝えずに済ませてしまうには、悲しいほどに素晴らしすぎるものであるというのが、その時の彼の胸のうちだったのだ。

「おまえは、多分」

公子は一転して考え深げに目を伏せて話し始めた。

その口調は穏やかだったが、ディカールは、貴く美しい指先がまるで不安を押し隠そうとするかのように苛々と草葉の先を持ってあそんでいるのを無視することが出来なかった。

「友を持たぬ、人と交わる術を知らぬ者には、いかに書を好み学問にうちこもっても、所詮癒し得ぬ血管が残るものだ、というわたしの考えを理解できるだろう。ところがわたしは実際に友を持たず...しかも出来得る限り自分を全き存在に近づけたいという強い願いを抱いてもいるのだ。」

白い指の緊張はますます強まるように思え、「わかります。」ディカールは自分が何を言おうとしているのかも自覚せぬままに、熱心にそう呟いていた。

「わかるか。だが...」

公子は唇をゆがめ、その日初めて苦しげな表情を面に出して言葉を途絶えさせた。

「わたしは友人が欲しかった。全てを話しあえ、助言し忠告してくれる相手がだ。」

しかしわたしのような生まれつきの者にはそれはひどい贅沢だったのだ。

人々はわたしを丁重に扱い、畏れ、敬いすらしてくれたが、1個の人間として愛する事は出来なかった...そんな事をすればわたしの立場に何かが生じた時、彼らの身にもひどい災厄がふりかかるだろうことはあまりにも明らかなのだから。」

...私はそのような事を恐れはしません...

意識されない熱い想いがディカールの胸をいっぱい満たしたが、己が身が下級の若騎士の分

際に過ぎないという自覚が、それを決して言葉にすることを許さなかったのだ。

「ディカール。」

切望をこめて公子は騎士の名を呼んだ。

「わたしは殆ど諦めていた。民達の生活がとりあえず平和でありさえすれば、全てはそれでよしとしようと思っていたのだ。だが、それなのにわたしはおまえのその真っ直ぐな眼に出会ってしまった。

わたしは... わたしはおまえならば、王の忌み子たるトゥリアンギアの領主ではない、ただのミアルドとしてのわたしの、友人（ミトラ）に...」

公子は耐えかねたように顔をそむけ、だがそれでも言うべきことを全て口に出してしまうまでは決して諦めまい、という意志の力のみで言葉が続けた。

それは彼にとってひどい苦痛を伴うものだった。2月前に初めて若騎士の姿を目に留めて以来、心を占めていた有頂天な喚起はもはや跡形もなく姿を消してしまい、残されているのはただ、馬鹿な振舞いをしたという後悔と、以前にも増して深い絶望と、だけであった。

彼は結局のところ問題の多い生まれつきのトゥリアンギア公子であり、友を求めるなど無意味な行為なのだ...

理性の全てが彼の行動を否定していたにも関わらず、彼自身は決して希望を捨てようとは思わないのだった。

そしてその不屈の情熱だけが、それまでの彼を陰惨な想いに走らせることすらなく支えてきた全てだったのである。

「おまえならばわたしの友人になれるのではないか、ディカールよ、わたしはこの2月というもの、その希望のためだけにおまえを探していたのだ...

おまえはそうなれるだろうか」

再び沈黙が訪れ、ディカールは我が耳を疑いながら凝然として動けずにいた。

時が、およそ夏場の暖かさの森の中で、2人の若人の周りでだけ凍りついてしまったかのようにそれぞれに感じられた。

若い騎士は一言を発する余裕も持たずにはしたが、それでも主人たる公子の強くそむけられた項（うなじ）を、緊張のために破滅を見まいとするがごとく閉ざされた蒼い瞼と、潔癖な白い額を、見つめないわけにはいかないのだった。

彼の心ははるかな昔より唯一つに定められてはいたが、それは彼一人の一方的な想いに過ぎない筈のものであり、そうして...

「閣下、ですが... 私はたかが士族の出、下級の騎士に過ぎないのだという事を閣下はお忘れてございます！」

「それがどうしたというのだ!？」

公子も、若騎士も、同じ位の苦悩がその声には満たされていた。

再三の静寂が落ち、だがやがて公子ミアルドは徐々に日頃の穏やかさを取り戻し、そうして...

唐突に、彼にとっての最悪の瞬間が、既にして過ぎ去ってしまっている事実気がつかされたのだった。

得られたものは彼が望んでいたような性急な解決ではなかったが、待つ、という行為は彼の絶える事のない"希望を持ち続けること"と、ほぼ同義語になる位に慣れ親しんだものでもあったのである。

そしてまた、様々な困難、行き違いや、立場による考え方の相違など...

そういったものを乗り越え克服せねばならぬという事さえが、彼のそもそも求めていたものの、紛れもない一面に含まれていたのだと、聡明な彼の思考は同時に悟っていた。

ディカール・デュアレストは彼が初めて、そしておそらくは唯一人、友人にしたいと願った相手ではあったが、かと言って今現在、彼に仕え、彼が護るべき臣民の一人である事実にも、変わりはないのである。

人の上に立つべくして生まれた輝かしき者は、言葉を選んで辛抱強く語り始めた。

「確かにおまえは我が配下にある騎士の1人に過ぎず、わたしはその主人であるのかも知れない

。だがおまえは今わたしの話を聞かされて、友を持たずに育ったわたしの幼い頃を、そう、同情くらいはしてくれたのではないか？

それにおまえは友を欲しがるとわたしの気持ちを、解ると言った。

そしておまえは... 何より大事な事に、おまえはわたし自身を、1人の人間として見返す事ができる。」

だが公子は家臣があまりにも頑なに押し黙り、あまつさえ彼の一言に打たれでもしたかのように顔を伏せてしまったので、再び昏い不安を抱いた。

「それとも、」

若い騎士は主人の深く傷つけられた笑顔を怖ろしくて見上げる事が出来なかった。

「それとも、おまえがわたしを慕ってくれていると感じ、わたしを理解し得るように思い込んでしまったのは、忠実なデュアレストよ。わたしの錯覚に過ぎなかったとでも、言うのか」

公子の声はあまりにも静かで、そこにはささやかな怒りの一片をも見出す事ができなかった。

それがかえって若騎士の胸に激しい痛ましさを感じさせ、主人の心に全て応えたいと切望させたが、出来る事ではなかった。

ディカールは長い年月の輝かしき人への敬慕と崇拜のあまり、彼我の身分の差を必要以上に畏れ過ぎてしまっていたのである。

(没原稿)

(没原稿)

2016年6月17日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(2\)](#)

「ディカール。」

切望をこめて公子は騎士の名を呼んだ。

「わたしは殆ど諦めていた。民達の生活がとりあえず平和でありさえすれば、全てはそれでよしとしようと思っていたのだ。だが、それなのにわたしはおまえのその真っ直ぐな眼に出会ってしまった。

わたしは... わたしはおまえならば、王の忌み子たるトゥリアンギアの領主ではない、ただのミアルドとしてのわたしの、友人（ミトラ）に...」

時が凝固させられたかのようにしばしの沈黙が訪れた。若い騎士は、一言を発する余裕も持たずに、ただ信じられぬという面持ちで主人たる公子の白く強張った顔を見つめていたが、気高く輝く瞳が緊張に耐えかねてかそらされると、ようやくに言葉をしぼり出した。

「私は... たかが士族の出、下級の騎士で御座います。」

「だがおまえはわたしを視る事が出来る！ それとも、おまえがわたしを慕ってくれていると感じたのは、忠実なデュアレストよ、わたしの錯覚に過ぎなかったとでも言うのか！」

輝かしき若い貴人の声は最早悲痛と言うに近かった。

その日から後、身分にはるかな隔たりのある2人の若者は、10陽ごとに必ずその場所を訪れるようになっていった。

日を重ね、時を経るに従って、位い低き騎士にも次第に領主と席を同じくする事に慣れ、やがて、初めに命ぜられた通りに主人に対して友人として振る舞う事をも、自然に出来るようになってゆくようだった。

それは如何なる躰の良さをもってしても若騎士の敬愛にはやる情がともすれば礼儀を忘れさせてしまうのを止める事が出来なかった、という為ばかりではない。

公子の言葉を聞き、その態度に触れるにつれ、次第しだいにディカールもまた公子のひどく深い孤独感を知り、理解するようになっていったのである。

領主の朗らかな屈託の無さ、真っ直ぐな気性、無邪気ですらある人懐こさなど、その身分に似合わぬ特徴を飲み込む程に、その裏に見え隠れする淋しげな子供のままの主人の素顔を、畏れ多いとは思いながらなお、ディカールはいとおしみ慈しみたいと自覚せぬままに想い始めていた。

...未だ、敬愛する主人が何故に自分だけを選んでそうした素顔を見せるのかを納得した訳でも、身分の違いの意識という高い板垣を打ち壊せたわけでもなかったが。

にも関わらず2人の距離は次第に縮まって行くようだった。若者達は互いに親しくなり、互いに様々な想いを打ち明けた。初めのうちは貴公子ばかりが子供時代の人に話すこともできずに積み積み積もった折々の思い出を、やがて主人の心を理解するに依じて、乞われるままに、若騎士も、己れのこと、故郷でのこと、旅の話や心に抱いている考えのことなどを、少しずつだが語り始めた。

そうしてそのうちに公子の、誰かに話しかけたいという衝動は一段落を見せたようで、気がつくディカールは1人で物語に熱中している自分を見つけ、その度に下らないことを喋ってしまったのではと恥じ入るのだった。

公子はそうした彼の過度のつつしみ深さを度々笑い飛ばさねばならなかったが、回を重ねるに

つれ段々にその笑い声は寛容なものでなくなり、朗らかさを喪い、いらいらと弱々しい哀しげなものになっていった。

若騎士はすぐにその変化に気づき、その理由をも即座に理解したが、そうかといってその檻の中から自力で抜け出す事は不可能なように思えた。

時の流れは急ぎ足で初夏から暑い盛りを駆け抜け、木の葉の彩り見事な森の秋が訪れた。

2人は常にそうし続けていたかのように、

「こら。来てはいけないと言ったではないか」 (1983年)

「こら。来てはいけないと言ったではないか」 (1983年)

2016年6月22日 リステラス星圏史略 (創作)

「こら。来てはいけないと言ったではないか」

「俺らも言ったよ。ミトラの誓いを樹てさせておくれってさ。」

「タジ・タン、私は子供にミトラ・タとなど呼ばれる気はないんだ。あと10才もしたらまたお云い」

「てっやんでえ、俺らもう12大祭だぞ。ガキじゃねーや」

「じゃ、あと9大祭にまけてやろう。私は次で21の祭礼だから」 (※)

気さくな若騎士があまり平然と笑っているもので、純粋な馬飼いの子供はむくれてしまって怒鳴った。

「なんだいに一ちゃんのバカヤロー！ んじゃ、俺らの姉ちゃんのタジ・ホンはどーすん気なんだよ。ホンは16の祭礼(*)過ぎちまったんだぞ。いっくら想っても振り向いてもくれない冷たいに一ちゃんに恋っこがれて、そのうちにゃ嫁(い)き遅れって呼ばれちまわア!!!」

「タジ・タン」

静かに名を呼ばれてタンはびくりとすくんだ。

「ホンは判っている筈だよ、私の心が彼女に深くつながれる事は決してないだろう。友人の一人としてあの娘を好ましくは思っても。

その上でなお私を追うか、選ぶ道を転じて他の男に目を向けてみることが出来るかは、全てタジ・ホンという1人の人間の魂の問題なのだ。誰も彼女に命ずる事は出来ない。強制する事も。...恋われている、当の私にでもだよ。」

「...やんでえ...に一ちゃんは冷たいや...」

「そういう言葉を使いたいなら今はそうして気を安めるがいいよ、タン。おまえもいつか真剣に人を愛することがあれば判るだろう。どんな人間にも己れを愛してくれと他者（ひと）に強制する権利が無いのと同様、どんな人間にも、誰かがその人自身の意志で他者（ひと）を愛するという心を、邪魔だてする事はできないんだ」

タンはごしりと拳で両目をこすった。

「わかんねーよ。俺ら今だってに一ちゃんが本気で好きだよ。」

「知っているよ。」

ディカールは小声で泣く少年の肩に手をかけてかがみこんだ。
樹々の葉がさわさわさわと静かに鳴っていた。

「だがミトラの言葉の持つ意味を、まだタンは十分に理解してはいないだろう。あれは不用意に誓う者にはとても危険なものなのだ。

己れの全存在を引き換えとして懸けるのだから。

普通に知られているよりも、はるかに深い影響力を持つ概念なんだよ」

「俺ら解んない。解んないのが悲しくなるよ。俺らただの馬飼いや見習いだもん、学がないから、解んないから、だからに一ちゃん...」

「違うよ、タン！ 私もおまえが好きだよ。馬飼いだろうと、領主であろうと、身分になど一切関わりなく...！」

...ここで若騎士は不意に言葉を切り、考えあぐねたように、また何事かに思い当たったように、ちらりと背後の樹々の繁りに意識を向けようとしたが、また直ぐに眼下の少年に視線を戻した。

「タン、お聞き、逆説的な話だからますます君を混乱させてしまうかも知れないが、ある意味では、君がミトラの誓いを樹てたいと思った、その事だけで私をミトラ・タと呼ぶ権利が君にはあるんだ。」

「え？」

「本源的にはミトラとは人の心の真（まこと）にのみ根ざすものだから。

だけれど人の心というのは移ろいやすい。今は誓いを樹てたいという感情は真実でも、君が大祭を重ね、ミトラの重みを実感として悟れるようになればそうは思わなくなるかも知れない。善だ悪だと言うのではなく、人の心というものの内部では十分にそういう作用が起こり得るんだよ。

だから。

神々をまで引き合いに出して誓言を唱えるのは、君の心の行く末を良く見極めてからでも遅くはないだろう？」

「俺ら大人になったってにーちゃんが好きだぞっ！」

「絶対に変わらない自信があるわけだね？ それならばますます、今意味も解らぬままに慌てて誓約する必要は無くなるじゃないか。

真に大切なのは誓いを樹てたいと思ったその感情であり、誠実を尽くそうとする意志だよ。

唱詞は結局のところただの形式に過ぎないんだから。」

「〜〜かんっぜんに、解んなくなっただっ！」

少年は大袈裟に頭を抱えこむ真似をして苦笑いを浮かべた。

「聞けば聞くほどまるっきり逆の事をいっしょくたに言われてるみたいな気がしてくるんだ。俺ら、もう降参。」

ははっと朗らかに若騎士は笑って子供の頭を弾（はじ）いた。

「そもそも有限の言葉で教えようとするのが無理なんだ。君の感想は正しいよ...私の言いたいのは要するに、急ぐ事は無いというだけさ。

ミトラの想いが人と人との間に存在し得るか否かが問題なんで、誓言がいつ為されるかじゃない。」

「まさか、わざとねじ曲げて言って俺らが困るのを面白がってるわけじゃーないだろね」

「馬鹿おい。タジ・タン、ミトラの真の重みが理解できたと思い、それでも私を愛してくれている気持ちに変わりがなければ、その時には喜んで誓いを受け容れよう。

「そうして私もタンをミトラ・タと呼ぶからね。」

「 ! ...ほんとかいっっ??」

「ああ。だから今日はもうお帰り。道は判るね? 2度と追いかけてなど来るんじゃないよ。今日はたまたま出会ったからいいが... この辺り、森の民でもなければアテもなくうろつくには危険なんだ。」

素直に帰って行く馬飼い見習いの後ろ姿を見送りながら、若騎士は自分も背後の繁りの向こう側へと戻ろうとした。

一本目の大樹の裏に、公子が固く口を結んで寄りかかっていた。

(※21の祭礼：男子成人の儀式をさす。)

(*16の祭礼：女子成人の儀式をさす。)

「そなた、子供相手だと随分に饒舌になるのだな。」（1983年）

「そなた、子供相手だと随分に饒舌になるのだな。」（1983年）

2016年6月22日 リステラス星圏史略（創作）

「...閣下。」

「そなた、子供相手だと随分に饒舌になるのだな。」

「そうでございますか？ 閣下の御側でも私は相当しゃべっている気が致しますが」

「わたしが以前ミトラの説明を求めた時には...おまえは騎士道教書の引用しかなかったじゃないか」

そうございましたかと若騎士が問い返すのへ、そうだ、と短く答えて公子はぷいと先に立って歩き始めた。

「何を、怒っておいででございますか？」

「怒る？ わたしが？」

「ええ。」

「怒ってなぞわたしはいないぞ。」

「そうですか？」

しばしの沈黙を枯れ葉のガサガサと踏み崩される音が空（むな）しく埋めた。

「何をわたしが怒らねばならないというのだ」

ややあって公子は一人言（ひとりご）ちるともなくいらいらと呟いた。

「怒る筈などないではないか。怒る理由など何も無かったのだから。」

彼の目から静かに白い滴が流れおちていった。

「...閣下...」

「閣下などではない！ わたしは、ただのミアルドなのだ。」

~~いつものように2人が話している折に、ある日突然、ついに公子は耐えかねたように叫んだ。~~

~~「閣下？ ですが...？」~~

「その名で呼ばないでくれ、おまえだけは。それとも...おお、

それとも間違いなのか？ おまえだけはわたしを見ていてくれるのだと、感じるのはわたしの思い違いに過ぎないのか。

そう考えるのは恐ろしい事だ... だがもしそれが真実なのだったら、せめてそれだけは正直に言ってくれ。

ディカール、おまえは主人の命令だからと、嫌々いつもここへ出向いて来るのではないのか？ 一体いつ反逆者として命を失うかも知れない主人の為に、ただ忠誠を誓った騎士としての義務を果たす為だけに、危険を犯しているのではないのか？

もしもそうなら... わたしは、もうここへは来ない。

何の関連もない下級騎士のおまえを、わたしの破滅につき合わせようとは思わないよ。」

口を切って、公子は静かに自嘲めいた笑みを浮かべた。

その、絶望と煩悶に疲れ切った表情を見、ディカールは恐怖にかられて思わず我を忘れた。

「閣下！ なぜそのような怖ろしい事を言われるのです？ 私（わたくし）の全てはあなた様のものです。これは下級騎士の務めなどで申し上げているのでは御座いませんのに！」

「閣下などではない。わたしは... ただのミアルドなのだ。ディカール。ミアルドと呼んでくれ。どうか」

「閣下... ミアルドさま。」

ディカールは口ごもり、ここ久しくしなかった事をした。

公子の輝く姿の下に跪（ひざまず）いたのだ。

「御無礼を。」

彼はつぶやいて公子の飾り帯を手を受け、その裾に敬々しく唇をあてた。

「どうか、ミアルドさま、私の忠誠をお受け下さい。私は初め、確かにトゥリアンギア領主に騎士として仕える事をお約束致しました。

けれど私の命は常に、あなたさまただ御一人の為のものです。たとえ...たとえミアルドさま、あなたが今の地位を追われるような日が来ようとも、この誓いが破られる事は決してないでしょう。

それでも私の心がお信じになれぬとおっしゃるのでしたら... どうか私をこの場で切り捨ててしまってください。

あなたさまの御心を不安にさせる位ならば死んでしまった方がましで御座います。」

彼が本心からささやく間だけ、公子は悲哀に満たされた表情で臣下の瞳をのぞきこんでいたが、やがて絶望して身をよじり、言った。

「違うのだディカール!!」

激しい震えから体を支えるために公子の背は崩れ去った低い土塀に預けられ、まるで、騎士から逃れようとするかのように公子の上体はよじれて、握りしめた両の拳が幾度も塀の上に叩きつけられていた。

「おまえの騎士としての忠誠がわたしは欲しいのではない。それを疑う位なら初めからここへなど来はしない。

そうなのだ。ディカール。わたしが欲しいのは忠誠などではない。

わたしが欲しいのは... ディカール... わたしは... わたしは... 」

公子の舌はからまり、ひどい緊張のために肩が呼吸のたびにせわしく上下した。

「ディカール」

「ミアルドさま」

そのような事があり得るだろうかと思つた。

自分がこのいと高き人をこの上なく貴いと感じているのと同じように、相手からも自分などが求められているのだとは、どうして考えられよう？

信じられない話だった。

だがそれにも関わらず、彼を拒絶したいかのように無理にねじられたミアルドの肩のわずかな震えが、全てを肯定していた。

「ミアルドさま...」

なおもディカールはためらっていた。言うべき言葉を見つけ出す事ができなかった。

そうして数分かが無言のうちに流れ去ったのだろうか。

彼の唯一無二の魂の主人は、なおも後ろを向けたまま、ぐいと背筋を伸ばして静かに押し殺した声で言ったのだった。

「行っておくれ。ディカール。お願いだ」

その言葉が身分の低い家臣の心の中の、最も深い扉を溶かし去ってしまったようだったが、年若い孤独な領主にその事が理解できようはずもなく、その状態で見せる限りの最高にしっかりした調子で、なおも続けた。

「すまなかった。頼むから今日はもう一人にしておいておくれ。それでも... それでも生涯を通じて得られるだろう最高の騎士であり、唯一人の友でもあるおまえまでをも失ってしまう事にはわたしは耐えられそうもないから、この次にはきつといつもの顔をしてここに立っている事が出来るだろう。

ああ、この次にもわたしはここへ来るよ。

だからおまえも忘れてしまっておくれ... 今日の事は全て。」

「ミアルドさま...」

「無理にそう呼ばなくてもいい。」

公子は途方にくれたように振り向いた。

「頼むから。ディカール、これ以上わたしが無様な真似を始める前に行ってしまうてくれ。」

そんな姿をおまえにだけは見られたくないのだ。

...それとも私は命令を下さなければならないのか、行けと？」

「いいえ... ミアルドさま」

蒼ざめた頬の上を今なお新たに流れ落ちる涙を、ディカールは見ていた。

この人は... ずっと昔から常に彼の心の中に輝き続けてきた美しい貴公子は、貴人として王者としてのありとある優れた資質と血筋を持って生まれつきながら、ただの一度も産みの母親からさえ愛し愛された記憶がなく、今、こうしてあまりにも無力に彼の前で冷たい涙をあふれさせている。

そうしてそれを隠そうとする余裕も術（すべ）も持たず教えられずに立ちすくみながら...

それでも彼は王の中の王、絶対にして孤高なる存在なのだった。

その誇りの尊さと、己れの傷よりもまず民を気遣う心の深さにおいて。

「いいえ。ミアルドさま」

膝をついたまま傷ついた王の瞳を見上げながら、断固としてディカールは言った。

「馬鹿な事はおっしゃいますな、あなたさまが私に命令などお出来になりません。またたとえ主人としての厳命を受けようとも、私は決して行きはいたしませんまい。」

「ディカール。お願いだ。わたしは頼んでいるのだ。」

色の失せた公子の唇がわなないた。

直ぐにでも気が違ってしまいそうなのを、必死に抑えているのだ、とでも言うかのように。

「馬鹿な事はおっしゃいますかと申し上げた筈でございます、どうして私にこの状態のあなたをひとり切りにさせるような哀しい真似ができませんよう。

それに私の前以外の、奈辺であなたさまがお泣きになれるというのです？ ...ミアルドさま」

驚いたようにぼんやりと公子は彼の騎士を見つめた。

「わたしは泣いているのか、ディカール？」

「はい。私のミアルドさま。とてもひどく。」

ぎごちなく手をあてて、はじめて彼は自分の頬の濡れていることに気づいたようだった。

「それならばなおさらだ！ わたしを1人にしておいてくれ！ ただの慰めでそんな優しい呼び声をわたしに聞かせる位なら...

いっそ、わたしを裏切ってしまうてくれ、忠実な若騎士殿」

力尽きた言葉とは裏腹に、青白く握り固められた拳が再び堀に打ちつけられていた。

そこに浮かぶ鮮やかな地の色に、鋭い痛みに胸を裂かれたように感じて、たまらず、ディカールは立ち上がって2本の腕（かいな）を捕えていた。

「お止め下さいませ。なぜ、自らを傷つけようとなどなさるのです」

深い哀しみが彼の額を覆っていた。

公子は何かにおののくように彼の瞳から逃れようとして、背後に低い壁の存在を感じた。

「ディカール、」

かつてこんなにも近く2人が寄り添い合って立った事はなかった。常に騎士は一步下がって、彼の主人に対し臣下の礼をとっていたのだ。

公子はわけもなく震えた。こうして立ってみると、騎士のほうはずかしく上背がまさっている

ようだった。

「...ディカール！ 離れてくれ。わたしは...!!!」

振りあげようとする両手をけれど彼は離さなかった。

「いいえ。ミアルドさま」

静かに呟くと彼は辛棒強く、腕の中の白く硬直した手指を解きほぐしにかかった。強張った指の一本一本を柔らかくにひきはがすためにしばらく時間が流れ、やがて現れた自らの爪に傷をうけて地を流す手の平に、騎士はあとう限りの穏やかさ優しさをもってくちづけした。

「お許し下さい」

「ディカール、やめてくれ、それがおまえの優しさから出るものなら」

力無く首が振られ、声はもう弱々しい悲鳴に近かった。

若騎士は、胸の内にふくれあがってくるあまりにも大きな哀しみのために、きっと自分は永遠に、今までとは違ったものになってしまうだろうと何処かで考えていた。

「...なぜお解りいただけません」

いま彼の目は正面から公子を捉えて言った。

「なぜ、解っていただけないのです、ミアルドさま。」

(...信じられないという顔で公子は後じさった。) (1983年)

(...信じられないという顔で公子は後じさった。) (1983年)

2016年6月22日 リステラス星圏史略 (創作)

...信じられないという顔で公子は後じさった。

「わたくしの、ミアルドさま。」

ディカールが彼の震える蒼白の腕を捕えた。

「一緒に。唱えては下さらないのですか、ミトラの聖句を？」

「ディカール。わたしは...」

ミアルドの喉は、舌は、激しくからまいもつれてその声を殆ど聴きとれない程にさせた。

だがしかし確かに2人は言い切ったのだ。神聖にして唯一の誓い、互いをミトラ・タと呼び交わす約定を。

『 ミトラの誓い 我（われ）言う。

他者（ひと）知らぬとも 汝（なれ）知らぬとも

我ここに言うなり 我が心の真（まこと）

汝に在（あ）りと 永（なが）の歳月に変わること無く

ミトラの誓い 我 樹（た）つ

他者（ひと）知らぬとも 汝（なれ）知らぬとも

我ここに誓いて とどめるなり

我が心の誠実（まこと）

汝に在りと 如何な異変に崩ること無く

ミトラの誓い 我 知る

他者（ひと）そしるとも 汝（なれ）忘るとも

我ここに我が魂（こころ）の居所定めるなり

ミトラ・タの聖なる誓詞（ちかいことば）を

樹（た）てしことを我は知る 』

続けてディカールは単身（ひとり）唱えた。

『 我ここにひとつの誓言を樹てし

我ここに誓言を樹てし私の真（まこと）を知る

我知る 我に帰する誓いを

我なる神知る 神々なる我知る

よしや我が魂の真（まこと）崩れし時

全ての我らを護る神々をも

滅びよ 』

ミアルドは不思議そうな瞳をしてディカールを見つめた。

「故郷に伝わる最後の誓いです。ミトラに関する。...他の地方には、知られていない聖句のようですが」

「教えておくれ。わたしも誓うから。」

「はい。ミアルドさま」

ミアルドは唱え、ディカールはその響きを深い感動をもって聞いた。

「何故と、お聞きになりますの？ 私に？」 (1983年)

[「何故と、お聞きになりますの？ 私に？」 \(1983年\)](#)

2016年6月24日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

目を覚ました公子は低く叫んだ。

「アルシア...！ そなた、真にアルシアか？ 何故ここに存る？」

「リージアが手引きいたしました。お仕度を、公子様。直ぐにお起（た）ち下さい。奈辺へなりともお逃げ下さいませ！」

「何?!」

そこで忠実な侍女は手早く知り得た情報を物語った。」

「父上が?! 馬鹿な!! いや... 信じよう。だが聞かせてくれ。どうしてアルシアがそれを知り得たのだ？」

「実家（さと）が、飛脚宿をしております。」

「王家の、極秘の使者だろう」

「女には、妖力が使えますのよ。わたくしの容貌、衰えておりませんでしょう。」

少し寂しげに、街道一の美女とも言われる士族の総領娘は頬笑んで目を伏せた。

話す間にも彼女は順々と公子の身に付けるものをさし出し続けているのだった。その、外衣を受け取ろうとする主人の若い手が、びくりと停まった。

「アルシア！ 何故...!!!」

「姉妹としての、...ごっこも結構面白うございましたわ。」

一瞬のためらいを過ぎてしまうと鮮やかな貴女は淡々として言っただけだ。

「何故と、お聞きになりますの？ 私に？」

「私はあなた個人に誓約を捧げた者ではありませんけれど」 (1983年)

「私はあなた個人に誓約を捧げた者ではありませんけれど」 (1983年)

2016年6月24日 リステラス星圏史略 (創作)

「私はあなた個人に誓約を捧げた者ではありませんけれど」

ディカールは言った。

「トゥリアンギアの公主にも、また神王家そのものにもまた、忠誠を誓ってもいるのですよ」

ミアルドが何事か反論しようと口を開きかけたあ、さえ切って彼はつぶけた。

「無論、ミトラの制約が、何にもまして優先されるでしょう。私がそれを破る筈のない事は、ミアルドさま...。」

(ミアルドは彼の腕の中で小さく肯いた。)

ですが、ミアルドさま、私は価う限り最大限の誠実をと、誓ったのですよ。そしてその人間の魂の真に求める所というものは...必ずしもその本人が最も良く自覚し得ているとは、限らないものです。」

「それではおまえとだけ生きていきたいというわたしの望みは、本気ではないと、信じられないと、おまえは言うのだな。」

すねて、傷つけられたように顔をそむけるミアルドを、ディカールは困ったように見つめた。

「信じる以前に、私は識っているのですよ、あなたがどんなにかそれを欲しているものか。何故って私自身の、最高の、永遠に手の届かないだろう望みでもあるのですから」

「なぜ」

「ミアルドさま。お判りの筈ですよ」

静かに言葉を選んだ。

「あなたがいま、したいと望んでいる事を、私も、本当になんかえられたらどんなにかと思っ
ているのですよ。ですが私には全てを、移ろいゆく心象を越えて、あなたの心が真に理想として
いる答えを聴くことができるような気がするのです。

私が今あなたの声に負けて、つまりは私自身の浅い欲求に敗けて、このままどこへなりと
も旅出っで逃げだしてしまったとします。その方がおそらくはずっと簡単で、表面的には幸福な
ようにも思えることでしょう。

しかし... "逃げ出すこと" があなたの魂に、見ることもすらしきぬ深い傷を与えてしまうのではと
私は危惧思っています。

お判りですか、あなたは御自分で考えているより遥かに、"王" そのものなのですよ、ミア
ルド。」

「判らぬ。判りたくも無い。」

頑固に、しかし弱々しくミアルドは呟いた。

唇を噛みしめて彼は耐えていた。

「望む気持ちは真実なのに、それを、求めては何故いけない。

わたしは... ディカール、おまえだってそうしたいのだろう？」

「あなた以上にね」

優しく額に落ちかかる髪をはらった。

「けれどあなたはしたい事としなければならないと思う事との、どちらを常に追って来たのです
？ アルシア殿の...」

かっとしてミアルドは叫んだ。

「おまえはいつでもわたしの一番触れられたくないところを突く！」

「同じ魂の半面なのですから...ミアルドさま」

かすかに嘆息してディカールは立ち上がった。

「さあ、もう出発しましょう。」

「ディカール！ わたしは。」

「あなたは。先に行きますよ、真のミトラとはどういうものなのか、あなたはまだ理解できていないのです...」

(イエソドの民)

「ミトラとは、何なのだろう？」 (1983年)

「ミトラとは、何なのだろう？」 (1983年)

2016年6月15日 リステラス星圏史略 (創作)

「ディカール？」

貴公子は遠慮がちに問いかけた。

「なんですかミアルドさま？」

2人は火の傍に坐っていた。

「ミトラとは、何なのだろう？」

「ミトラ...ですか」

ディカールは困ったように少し微笑んで居ずまいを正した。

「今日はまた、ずい分とむづかしい質問をなさるのですね」

「前から尋いてみたかったのだ。ただ...今までは誰に尋ねても、満足に応えてもらえなかったから」

「私も、よく知っているわけではございませんよ。」

「ミアルド様、ご存知ないのですか？」（1983年）

「ミアルド様、ご存知ないのですか？」（1983年）

2016年6月15日 リステラス星圏史略（創作）

「ミアルド様、ご存知ないのですか？」

そう考えていけば、わたしたちは皆ひとつのミトラです。

私があなただを愛するように、あなたも、別のどなたかを愛して御覧なさい。

そうすれば、お解りの筈です。

ミトラを持つこと...ミトラの想い、感情を、自らのもとに呼べること...

ただそれだけが、どんなにか幸福なものか。

いつか、否応なしに我々は、離ればなれになる日が来ることでしょう。

私には判ってしまうのです...

ですが、例え私のことをお忘れになっても、

私の申し上げた言葉だけは、覚えておいて下さいませ...

それだけで、

私たちは、永遠に1つのもので存ることが、できるのですよ...」

第二部・還るべき者

(没原稿)

「ディアよ、」 (1983年)

「あなたの道があなたのものであり続けますように！」 (1983年)

2016年6月24日 リステラス星圏史略 (創作)

「ディアよ、」

困惑した顔でミアと呼ばれた美しい若者は尋ねかけた。

「おまえの言うことはしばしばひどく喰い違っている。...一体どれが真実なのだ？」

《誰でもない親しき者》(ディア・アッサム)と名乗る娘・女戦士(ルワ・ヘルマ)は微笑んで答えた。

「どれも。全ての言葉が真実に通じ、そして全ては仮の姿なのです。」

(ディア・ンバングロンゴ)

「リージアは亡くなりました」 (1983年)

「あなたの道があなたのものであり続けますように！」 (1983年)

2016年6月24日 リステラス星圏史略 (創作)

「リージアは亡くなりました」

静かに、しずかに、美しい微笑を齢老いた娼婦は浮かべた。辛苦を超えたその穏やかな口調で、ディアは、それは南方の女戦士が、

「御自身の道を行かれよ。いと尊き御方。」 (1983年)

「あなたの道があなたのものであり続けますように！」 (1983年)

2016年6月24日 リステラス星圏史略 (創作)

「母上。」

ディカール・ディアは言った。

「私はあるひとつの答えを求めているのです。長らく考えめぐねて遂に私は判りませなんだ。

ですが祭司にして巫女、姉つ国神の御教えを直接に伝えられる母上になれば、この答、得られ
ましようか」

「問うて御覧、我が息子」

年老いた母親は居住まいを正した。

「ある御方のことです。私が、唯一人、ミトラ・タとお呼び申し上げる御方です。」

ゆるゆると、ディカール・ディアは長らく心に溜めていた思索を言葉に紡ぎ始めた。

「その御方は母君の御心をうけられたことがなく、いかなる血縁者も、また乳母も師も、心をつ
なぐということを身をもって御教えする事が出来ないませなんだ。彼は "大いなる母 (マリ
ン)" の存在を教与されることなく育てられておしまいになったのです。

私のミアルドさまは長

「簡単なことじゃ、ディカール。そなたがそのミアルドの《還るべき場所》、母 (マリ
ン) にな
ったのじゃから。」

「...有り難う存じます、我が母なる御方。」

これで、全ての覚悟が、決まりました。」

聞き終えてやがて、静かにしずかに穏やかな若い娘は言った。

その姿の周囲を、薄暗い揺ぐ燈火とは全く異なる、目立たぬが純粋な光芒が、勁い精神の輝きが、とり巻いていた。

「御自身の道を行かれよ。いと尊き御方。」

静かに返礼する、親しんできた老母おまた、自分と同じ光にとり巻かれている事を、今初めて知り、ディカールは視ていた。

夜は更けていた。老婆は首をねじ曲げて下男を呼び、提灯の用意を命じた。

自ら尊しと呼称した相手を、召男（めしおとこ）に示した。

「わたしの息子を野营地まで送って行っておくれ、ディアンよ。」

「何云ってんだいバーさん、こんな美しいお嬢さんを捕まえて。こともあろうに息子さんと間違えちまってるようじゃあ、いよいよ寄る年病（よるとしやまい）の始まろうというものだけ」

「美しい？」

お嬢さんと呼ばれた娘はげんげんな顔をして、それからやおらくすくすと笑いだした。

「有り難うございます。そうでした。そうですわね。」

...それでは。左様ならば。お母さま。また道の果てでお会いすることもございましょう。」

「気を、つけて。我が子よ。」

「ええ。あなた様も。あなたの道があなたのものであり続けますよう！」

暗く静かな難民集落の内部をくぐり抜けて、燈火を持つ下男に送られて女は1人永遠に去って行った。

軍村（いくさむら）の境に付いて召し男を主人のもとへと帰し、割り当てられている部屋へと

歩くうちに、向こうに、誇り高きディアの相棒、勇戦士トゥ隊長が、彼女を探しあぐね、待ち受けて立ち尽くしていた。

「ミアさま。」

ディアの澄んだ声が静かに届くなり、トゥは、即座に振り返り、大きな安堵を浮かべた。

「ディア... わたしの。」

「どうなさったというのです、このような時刻に？」

「探していた。急に... 不安になって」

「不安？」

「居たのか、ディア。良かった... 去（い）ってしまったのかと思った。」

「行く？ 私が？ 何処へ？ 何故？」

「奈辺（どこ）へだか...」

トゥ隊長はぷいと美しい横顔を背けてみせた。

「わたしに判るわけがあるか？ だが、いつの日か、おまえはわたしの側から居なくなってしまふ。そんな気がするのだ。」

「馬鹿なことを。」

ディカール・ディアは微笑してトゥ隊長の顔に落ちかかる巻き毛をそっとはね上げた。

「また馬鹿なことを仰しゃいましたよ、ミアさま。私に、あなたさまのお側以外の奈辺に、戻る処が存ると言うのです？」

「...何度聞いても、この話は気に喰わぬ」 (年代不詳)

「あなたの道があなたのものであり続けますように！」 (1983年)

2016年6月24日 リステラス星圏史略 (創作)

「...何度聞いても、この話は気に喰わぬ」

熱心に聴き終えて、小首をかしげ爪を噛みながら少女は呟いた。

「この話がここで終わってしまうのは間違いだ。そうは思わぬか、そうおばば。」

「それではおのしはこの話の続き、どう付けやる。ディカール・ディアの古謡はかのタッサール侯によって語られし物語を古代七詩聖の一人・トーミアが伝え語りの型にしたもの。ばばらはそれより一言なりともはぶいてはおらぬのじゃぞえ。」

「...判っておるもの、そのようなことは...」

少女は、しばらく考え込んだ後に、たどたどしい韻律を踏んで語り始めた。

「のう聞いておくれ。わたしはこのようであったならば良かりうと思うのじゃ。ミアルド公子はディカール・ディアを探したであろ。それはそれは懸命になって探したことであろ。」

(設定資料)

(設定資料)

(初期設定と蛇足な講釈)

[『水の大陸』 ～逆願樹の森～](#)

2006年4月22日 [連載](#)

ぎゃくがんじゅのもり.....。

タイトル、今つけた(笑)。

物語自体は昔からあったけど

(てか、これも前世夢ネタだ)、

タイトル無かったんだ.....。

(これも今、気が付いた！) (^◇^;)

古代《水の大陸》の精神文化の根底をなしている《ミタリの法》が深く関わってくる話？ そうでもないか.....？

そしてやっぱり、(途中までは)

腐女子の皆さんがよろこぶ話☆

+++++

あ、違った！ タイトル有ったわ！ (^◇^;)

今、古～い設定資料をひっくり返したら、

『森のふところ 還るべきもの』という、

非常に文学的な？ タイトルが書いてある.....(笑)。

いつか本当に書くときには、どうなっているやら☆

設定ノート

大アタラン, もしくは古アトル・アン物語

四部作

- ・ 殺される神
- ・ 森のふところ還るべき者
- ・ ヴァセラーセダン ～ 夢見る民～
- ・

1983.7.6. これは基本的に ディカール & ミアルド 用 設定のおと なんですが。

- ・ 仮題 : 森のふところ還るべき者 (もの)
懐 還る (ふところかえる) では具合が悪いが、
還りゆく者?
還りきたる者?
- ・ テーマ : > H. ヘッセ『知と愛』 (ナルチスとゴルトムント)
ラスト・シーンの ゴルトムント最後のセリフ。

「だが、ナルチス、君は母を持たないとしたら、
いつか一体どうして死ぬつもりだろう？
母がなくては、愛することはできない。
母がなくては、死ぬことはできない。」

ここから私なりに考えだした、あるいは読みながら同時に抱いていた、結論もしくは答えのようなもの。

・ ナルチスはちゃんと死ねるんですよ。ナルチスは愛することを学んだ（教えられた）から、ゴルトムントから。ゴルトムントに愛し愛され、奔放さに対する考え方の誤りを正された 事によって、ゴルトムントはナルチスの《母》になった訳です。ナルチスはゴルトムントという《母》を得たのだから、いつか必ず安心して死につくことができる訳です。

↓ ここから

・ 人は、まあ、愛し愛される事を学ばなければ不完全であり満たされない訳です。多くの人は、無論、生まれて初めて、もしくはその以前から、血を分けた実母の愛に触れて育つので 決定的な欠陥を持って、成長してしまう事は少ない。そうでなくても、例えば実母を持たなかった場合でも、普通は誰か代替りの者が愛情を持って育てるので一応問題はない。その他、愛情ヌキで育児が行なわれた場合でも（例えば孤児院等）、人間（いきもの）てえのは強いですから、上位者から与えられなくても同類同士でそれを補い合うという器用なマネができる。しかし、それが出来なかった少数の特殊な場合はどうか。（考えてみれば 鋭 や 好 の成長過程もこのケースだなあ...）

2006年6月24日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#)

・ (前ページの続き)

で、ディカールとミアルドという個体の形を借りて、この問題に 理想の解答 (鋭の場合はまた別の結論であり、好の方はいまだに未解決である) を与えようとした場合どうなるか。特異なケースとして育ったのは貴公子ミアルドである。対するディカールは十二分な愛情と嫉と信仰を得て育ち、更に天性の讀むべき【他者を思いやる心】を持っている。(※)

ミアルドはまあ、前生の努力のたまものでしょう。性格・気質的には(典型的なABではどうやらあるが)非常に優れた、前向きで根の明るいものを持っている。努力家で理想家で最終的には楽天気質で。誰に教えられなくても天性のあふれる程の他者への愛情と上へ立とうとする責任感を持っているのだが.....前者はその漠然としたものの使い途をまるっきり教えられず、後者は下手にそれを行行使すると必ずや裏目に出るという立場におかれて、なまじ頭が良すぎるのでそれら全てを理解して、他者の幸福の為に黙って我慢してしまって。でもまっとうな人間が聖人君子でもあるまいに、まして哲学的事実気がついて成長欲旺盛な者である場合.....いつまでもそう孤独に耐えられる筈がないんだよね。まあミアルドはかなりよく保った.....というか、はつきし言ってあまり有り得ない仮空性の強いキャラだとは自分ながら思うが。

さて気がついたら結論は右ページの大矢印に書いてしまっていた。

要するにあれがテーマだ。

>>> 《母》(イシスとでも、イブでも、マリアでも、何でも)というものは要するに《絶対的な愛情》→この場合、与える側の愛情の深さに関しては議論をおかない。与えられた側がその絶対性に対して疑問・疑惑を抱いてしまうか否かである。→を注いでくれる相手のことであって(この場合ヘッセの使った語義とは相当に異なる・あれは一切空とか「すべてはそれでいいのさ」式のかなり奇妙な心になじむ感覚だ)それを与えられさえすれば人は帰るべき所を得るのだ、という事実。

(してみるとあたし個人は母親の愛情を実はハナっから疑っていた事になるのか?)

(※疑問その1.)

にもかかわらず(?)、彼がミアルドを特に選んだ理由は? (*)

・ミアルドは天性の貴人であり、王の器、人々を統べるべき者である。

(ディカールはそうではない)。

・同情と愛情の違いはどこにあるんだ。優しさと恋心と?

・ようするにこの2人は結ばれるべき《運命の2人》だったのさっ

(*)ミアルドの帰るべき所はディカールの側(そば)だったのに、ディカールにとってはそうではないのか? but ... 実母ん所に帰るんだとも思えないけど.....

> 判った! つまり《母》てのは絶対的な愛情そのものの事なんだよ実は。んで、狭義での《母》はそれを体現もしくは具現化し、人に教える誰かしらの事なんだよ。だからナルチスはゴルトムントを通じてイブの存在を知り、ミアルドはディカールの内にそれを見出したと。で、ディカールはもちろん最初、生母からそれを教与されたんだろうけれど、

既にそれを消化し、与える側にまわってる。だから図式としてディカール=母（絶対的愛情）に成り得るんであって、

（母=絶対的愛情）【誰か（母）】 > 教与 > 人。

.....あれ？

ミアルドは未成長の母である。人みなすべて母である.....ゴンゴンゴン.....よーするにレンズかプリズムか？ それとも色即是空の世界か.....うん。

わーらん。頭がパーじゃ。次頁へ。

2006年6月24日 [連載 \(2周目!・上古神代~水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

◎ とーとつに荒筋なのさっ <反動でNaNaになる。
(哲学的命題なんざ続けて考えられるもんかっ)

1. ミアルドは王の不肖の長子として生まれ、そう育つ。
2. ディカールは伝統ある一士族の末子として育ち、
騎士見習いとして一子で頑張る。
3. ミアルドはディカールに出会い抑えていた感情が暴発しそうになる。
4. ディカールは尊敬・崇拜していた主人に唐突に友人扱いされて面くらう。
5. 友人ごっこは直ぐに素直に恋愛感情以上にまで発達する。
but, 相手の感情と立場は? 自分の行く末は?
> ディカールは朴念仁かっ?
? 何を考えて生きてるっ
6. ?
7. かんどーの告白シーンですね。
8. 王の暗殺騒動があって貴公子は一人で都落ちしてディカールを訪ねます。
9. ディカールは当然のように脱走して公子を守って逃避行に入ります。
10. 森の《守りうば》の小屋で。老婆の死体みつけて。
ミアルドさんお熱で。それから。
11.人格ほーかいごっこ、やるの?
12. ケッケケッ 緑の妖婆っ!

※ おばばとアンサの昔語のモチーフを構成として使うこと。

=====

13. 戦乱がおこって、それでどこぞの地方の人類側戦線に、
記憶喪失の金髪的美戦士と、その世話をした美人女戦士が
志願して加わるわけでしょう。
14. 隊長ミア・トゥと
女戦士(ルワ・ヘルマ)ディア・アッサムさん御活躍。
15. 将軍閣下、タルーサ タッサールさん(仮名)登場。
ディアは美人です。>いいよろう。
16. ディアはミア・トゥの話をつタルーサにうちあけます。
戦況説明? ミアルド公子は貴重な人材。
17. まあ、いろいろとあるだろうが.....

- サムサラ地方おちて難民のむれ。
ディカールのお母さんとディアの会話。
 - ミア・トゥと隊長たち？
 - タルーサ公とディアのえんえん会話っっ!!
 - ミアさんとディアさんのおはなしっ！
- etc.

(18. 帰るところを得る話)

19. トゥ隊長はディアにプロポーズします。
ディカールと呼ばせられ、記憶をとり戻し.....そして。
20. ディアはタルーサ公を呼びに行き。無言の
さようなら。そして ジ・エンド。

21? 政略結婚でめとった幼い少女妃をミアルドは慈しみ守るでしょう。
彼女の死後、悲嘆にくれる彼のもとに王子の乳母として
タルーサ公妃ミアが現われるかも知れません。

◎ この時代の歴史的状況 えっ!?

(7/13)●だからあ、アトル・アン古伝説シリーズ。

神々の既に失われし時代？

- 《神》という語の2つの概念。
一般的なものとサムサーラに伝わるものと。
- 後にひろまるサムサラ教の初まりですかね...ディカールは。

2006年6月25日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#)

◎粗筋Iについて。

ヘッセはやめましょう。あたしはNaNaのやり方が好きだ……マンガと同様に、場面選択による具体的な描写によって……だけど少しは抽出的な表現も混ぜて。

☆ 三身の法 …… 第83代王タンブゲイルトが定めた。

『大罪ありし時、その咎（とが）三身に及ぶべし』

後に《罪》だけでなく「処分」に関する掟となってしまう。

加えて《心をつないだ者》をも身内とみなす不文律があるが為に、立場の危しげな者とは親しくすることも同情をかける事もできない。

モチーフI. 公子11～2歳くらいの時。

教育係でもありトゥリアンギアの実質的な宰領でもあるタインジェア伯と公子との会話。「それではおまえもわたしの血縁以外の身内＝ミトラとはみなされないのか、タイン伯?」「お許しを、閣下。今までの所わたくしは王陛下に申し付けられた事以外は決していたしませんだ。この限りでは私は閣下（あなた）…… >原稿。

モチーフII. 公子18くらいかな。

馬で領内をぶらついている。騒ぎがあるので寄って行ってみると罪人の刑罰についてである。 >原稿。

[『森のふところ・還るべき者』 ? \(1983.7.13.\) 5](#)

2006年6月25日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

ミトラ = 《我が表裏 の 友》
(をなす)

第1部・森のふところ ~~—《ミトラなるもの》—?~~

☆ テーマ ミトラ? もしくは愛情について。

第1章・ ミトラなるもの

= 荒筋1. and ディカールと盗賊の長と早耳くんとゾンビの話

第2部・還るべき者 ~~—『《母》?』—~~

☆ 《還るべき掟》 = 『母』 についてディアが把握するまで。

アトル・アン古伝説シリーズI. であることは間違いない。

◎ 登場人物一覧

☆ ディカール・デュアレスト・ダム・サムサーラ

(サムサーラ出の若騎士ディカール)

主役。イズルン森出城勤務の平凡な(?)若騎士。

.....非凡だなあ.....

> ディア・アッサム (ディカール・ディア)

正体不明の謎の美女(?)。

自分では亡兄に武術を仕込まれた下級士族の娘と言っているが、

言動に食い違いを作っても一向に気につけない。

ルマルウンに誓いをたてない。

☆ ミアルド・トゥリアンギア・サクア

(トゥリアンギア領主ミアルド)

主役。神王の不義の長子。

> ミア・トゥ隊長

忘れ病の勇戦士。ディアに助けられ、以来共にいる。

(ミアルド側)

● アルシア・ナタル 元公子の侍女。恩を受け、公子にミトラを捧げる。(ミトラ)

● リージア・ナタル アルシアの義妹。ルマルウンに剣を捧げるもの。(ミトラ)

● ク・スールア侯 トゥリアンギアの実質的な管領。

ミアルド公子の養・教育者。

また目付・監視役でもあるをも課せられている。

スールア家の族長。

● 男I 愛人である 女I が妾にやられるのを防ぐ為に、

離縁してアセドの魔薬に手を出し、士卒に捕らえられた。

- 女I..... 男Iの愛人（ミトラ）。刑を受けた男を追って鉾山（やま）へ行く。

（ディカール側）

- 早耳 若騎士修業時代の友人。
（もっと重い役割を負わせるか否か？）
- タジ・タン イズルンの馬飼い見習い。ディカールを慕う。
- タジ・ホン タンの姉。ディカールに恋する。
- 母親 サムサーラの森の祭司・巫女の一人。ディカールの母。
- タッサール将軍（侯爵） タイマア軍側の総指揮官。
女戦士ディアを愛し、ディカール・デュア、ミアルドの物語を知る。
- 男II + 女II ミトラ・タと呼び合う中でありながら殺しあった。
その事を公言して、男も怒る民衆に殺された。

[『 \(メモ\) 』 \(何年かな? 7/13\)](#)

2006年6月24日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

ミアルド・トゥリアンギア (ギア)

>ミア・トゥ隊長

ディカール・デュアレスト・ダム・サムサーラ

>デュア・アッサム

7/13

ミトラの誓い 我知る。

心つなぎし者 その定め違うこと

なかれ。そは唯一の神聖

絶対

なればなり。

ミトラの誓い 汝 (なれ) 知る。

2006年6月30日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#)

根源未詳。かの四世界鎖国時のどさくさに紛れてアトル・アン・ティス中西部森林地帯、通称《谷》に定住していた。精霊の力や大地の不思議に関して優れた知識を持つので、史学上、しばしば天人族エルシャマーリヤの系統と解されていたが、複数神信仰や後世における一処不住性など、それでは説明のつききらない特質・属性を多く持つ。また惑星リスタルラーナへ漂着した移民船フェアリスティラーヤの乗客中、単性長寿のイシール族、これは人種的特徴から推して明らかに天人族であろうと思われるが、史略初期に示される行動形態にはむしろ《白の一族》にこそふさわしい大胆さと情愛の深さが見られる。実験的に創造された種族かあるいは異界からの移住民であるにせよ、おそらくその起源は天界エルシャムリアの時代に遡って求めるべきであろう。上古の資料を入手する術がないのが残念である。リステラス辺境、惑星《緑》おまび《白沙》における同系の文化も、どの時点での移民の成果であるのか現在のところ不明である。

☆ 惑星《地球》における史略。

アトル・アン・ティス中西部森林地帯の北辺、大河スウェンの上流域《谷》における定住時代が、現在判明している限りでは最古のものである。当時は《白の》とは自称せず、サンサラ、《谷の一族》という呼称が使われていた。四囲を深く広大な森林に守られて、平和な狩猟・採集・農耕の時代が長く続き、安定した芸能文化が発達していた。が、この時点で既に、一族の漂着の伝説と流浪への予言が存在していたという。来たるべき存亡の危機に際して一族の守り手とする為に戦士の村ザグに才能ある者を送る SEND・レーサなる伝統があり、活火山カリンシカの隆起により東方との交易の道を断たれて後は、帝国の臣領として少数の優れた戦士を提供し続けた。

《異界からの侵入者》ゼクトにより帝国が一時瓦解した際、広大な森と谷から焼け出され、難民の群れと行を共にした一族は、その後、戦乱が収束してからも再び安住の地を持つとはせず、《白》を最首とする各色の派にわかれて大陸内を流転し、各処でその芸能や知識によって生活の糧を求めた。

星船来襲によって大陸もろとも帝国が失なわれた後、長い時代を彼らはその時代その土地に合わせて生きのびてきたが、ユーラシア全域を結ぶ東西交易の路が開けると各色支族は商人や旅芸人と紛れて再合流し、また大航海時代と共に惑星規模での血族結社となった。ただし、最首たる《白の一族》が好んで版図としたのはアフリカ北西部から中国奥地にかけての乾燥地帯であり、どのような死の砂漠も徒手空拳で渡る不死の一族、また、水枯れの年にどこからともなく現れて水の場を復活させる魔法の歌と舞の一族として、周辺諸族の畏敬を受け、多くの土俗的信仰に半神として受け容れられた。また、中東地方において唯一神教が流布した後には、超人的な力を

持つ異教の魔神として、誇張された説話の中に《白の一族》と覚しき事跡が散見される。その他、下層支族である《緑》や《紫》は流浪芸人や流しの職人としてしばしばジプシー部族とその存在を混同視され、《茶》は多くが商人や奴隷に溶け込み、《青》は海洋民として、南太平洋諸島を根城に世界へ出て行った。

第三次大戦終息直前、多くのESP者を輩出した時代、《白の一族》から独立した《黄金》のイルレアーナがESP者の同盟《ア・ルーヴァ・タウレ》を建国、各支族の生き残りの殆どがこれに参加し、一族としては発展的解消をとげた。地表に残った者は新たに部族外の者も加えて《灰色の一族》アイン・ヌウマを名告り、極東草原地帯に広大な遊牧の版図をかまえたが、惑星政府統一に際し部族の解散を宣した。

○ 史略上の重要な人物 ○

1. ハユン家のアマラーサ、及び、アグニス家のトゥード

カリンシカ交易路が断たれる寸前、最後の児童送遣（センド・レーサ）として戦士の村ザグへ送られた2人組である。どちらも優れた戦士であり、慣習に基づく婚姻によって《谷》の血統をザグの村に伝えるものと思われていたが、ハユンのアマラーサは発心して月女神レリナルディの巫女となり、全ての人界の掟から解き放たれた聖戦士となった。

《谷》を守る大河の精霊スウェナ・ラディが《砂漠の王》に略奪された際、同じくスウェナの対者として《谷》を守る風の精霊フエンがアグニスのトゥードに一族の危急を告げ知らせ、アマラーサの助力を得た彼は《砂漠の王》と戦い、スウェナを解放した。この旅の後、2人は再びザグの村へ戻ることはなく、生涯を共に漂泊のうちに過した。隆起後のカリンシカ連峰を最初に踏破して交易路を再開し、各地で住民を悩ます邪竜や悪王を退治した等、伝説に語られる武勲譚は数多い。また、月読み峠のレリナル神殿を訪ねたアマラーサは、女神及巫者集団である月読み衆との問答によって宗教史に新たな展開をもたらし、婚姻によらない個人の意志に基づいて出産した最初の巫者となった。

(>月女神信仰の項、参照)

(>女戦士 リィ・カタナ)

2. ディア家のディカール、

(もしくは帝国風にディカール・デュア・ディアレスト)

帝国の臣領としての《谷》の時代の末期、武家の子弟として兵教育を受け、トゥリアンギア公領に配された彼は、~~たぐつかの~~偶然から不遇の公子ミアルドと出会い、その対者（ミトラ）となった。父帝崩御の際に異母兄たる新帝からの処刑命令を察して国を落ちた公子に付き添い、《谷》へと抜ける森の旅に出るが、途上で異界者ゼクルディ族の帝国侵攻を知り、唯一の帝位後継者

となった公子を守って帝領奪還の長戦を指揮した。同時期にゼクルディの放火により《谷》は消失したが、彼はそれを救いえず、以後、流浪する一族のもとに戻ることもなかった。晩年は帝位を回復したミアルドの腹心として、また公子の養育係として仕え、自らは子をのこすことなくその生涯を閉じた。伝記には生年及び性別に関する記述に混乱があり、あるいは兄妹もしくは双生児による業績だったのかとする説もある。

(>対者思想(ミトラ・タ・ヴィアタ)及び三身の法の項、参照)

3. ミーニエ・マリセ・ブランチェスカ＝ガクト・イソハラ

(磯原マリセ)

生粋の白の一族として砂漠に生まれたが、少女の頃に縁あって欧州人のキリスト教宣教師の養女となり、フランスで医学を修めた後、国連所属の野戦(従軍)看護婦として難民及びゲリラ軍の救護に努めた。その地で遭難し奇跡的な生還をとげた世界的な報道カメラマンであった磯原岳人の妻として日本国へ帰化して四児の母となり、障害児施設に勤務するかたわら、緑慶年代の同国の暮らしについて優れた手記を残した。黄金のイルレアーナの《血の濃い(両縁の)》従姉であり、磯原清の実母であるとされている。

4. 《黄金》のイルレアーナ (アルヴァトーレの太后母)

第三次世界大戦さなかの混乱期に白の一族として生まれたが、あまりに強すぎるそのP能力のゆえに長老たちにその存在を受容されず、自ら独立して《黄金》を名乗った。《ムーンII》衝突回避の際、アルカス・アルヴァトーレの呼びかけに最初に応じたひとりで、以後、彼と共にESP者のための王国建設に力を尽した。アルヴァトーレ大公国の初代公女ヘスティアは、2人の遺伝子から造られた人工授精体である。

(>アルヴァトーレの項、参照)

5. 磯原 清 (キーヨ・エ・ミーニエ)

外部に嫁したミーニエ・マリセの末子であるので正確には一族の者ではない。緑慶年代の日本国に生まれたが、月に遺されたエルシャムリアの母思考機械リーシェンによって仲間と共に時代を運ばれ、最終戦争中期のアルヴァトーレに転籍した。最盛期のアルカスに匹敵するP能力を持つことからその再来と呼ばれ、宇宙植民者連合軍ゲフィオンに協力。戦闘中死亡した。ゲフィオン隊長・杉谷好一の妹であるユミコ・フェア＝スギタニとの間の一児、杉谷 狼 は、後に地表上で《青狼伝説》団を結成、《灰色の一族》に合流した。

(>最終戦争の項、参照)

6. 蘭家の冴夢 (サエム・ラン＝アークタス)

《最終戦争後》と呼ばれる時代の末期、極東草原地帯全域をその版図とした《灰色》＝《人間の一族》アイン＝ヌウマの最後の族長であり、地球統一政府との戦争を、その使者ヨセフィア・アークタスとの婚姻によって回避。部族の解散を宣して新しい時代へと溶け込むよう主張し、自ら範を示してシゾカ市へ移住した。吟詠詩人として名高かったが、二女を残し夭逝した。

7. サキ・ラン＝アークタス（蘭家の咲子）

解散を宣した後の、部族外との婚姻による出生であるので、自らを一族の者とは認めなかった。サエムとヨセフィアの二番目の娘であり、第一期官費留学生となって地球を離れ、生涯の殆どをリスタルラーナで過した。科学者マリア，ソレルの腹心として働き、鎖国を続けていたアルヴァトーレ女王国との間に国交を回復させ、その地を借りてESP者の訓練校、エスパッション・スクールの開設に力を尽した。その後、深宇宙探査船に同乗し、子供を残すことなく消息を断った。

(>エスパッションの項、参照)

☆ 惑星《白沙》（しろきすな）における史略 ☆

(...2016年6月24日現在、このシーンは既に「別設定」となっております...☆)

[「何故と、お聞きになりますの？ 私に？」 \(1983年\)](#)

2016年6月24日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

...2016年6月24日現在、このシーンは既に「別設定」となっております...☆

(も一最近、連中、どんどん脇キャラ増やして...！ 文化背景設定かってに固めて...！ 書くのに(バイトやめて毎日8時間集中したとして)一年はかかる内容量に増えてます...☆)

コメント



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたら句きあり\)](#)

2016年6月24日18:42

...とりあえず今、2部構成から3部構成に増やした...w

[\(書きかけ改訂\(現時点\)資料 2\) 『還るべきもの』 商業用プロット... \(練り直し☆\)](#)

2016年7月1日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(3\)](#)

1. 「商業用」と考えた場合、(予定)掲載媒体によって、書き方はまったく変わって来る話。

いっそ開き直って「BL誌」に売り込むのであれば、エロ...は無理でも恋愛?...的要素を全面に押し出して、歴史的背景はざっとぼかして、カキワリ説明程度に流して書くくらい。「ストーリー」より「キャラ優先」。(^^;)

(※むしろそれなら「漫画の原作」的に書きたい...)

2. 最初っから「ディカール・ディア」を「女性騎士」として書く手法。

https://www.youtube.com/watch?v=_k9vkcc9Nol&index=125&list=PLVBxO3o-avAcDIhDc2GVVdLkDh_BaoK2P

Gregorian & Amelia Brightman - Peace On Earth (Little Drummer Boy) LYRICS

↑

まさにこんな外見の、律儀で頑固でマジメで博識で度胸も力量もコネもあって、かなりイロコイザタには鈍い？女剣士...

w (^^;) w

これにしちゃうと純粹に「異世界？(超古代)架空歴史ファンタジー+故国防衛戦争もの」になりますね....

(書ければ、どっちでもいいや...。)

希望と絶望の神アゾルディアド

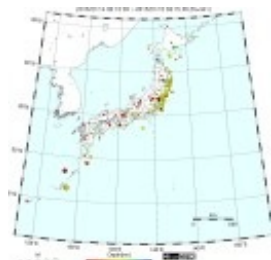
(借景資料集)

いわゆる「ユダヤ民族の失われた10支族」のうちのひとつが、黒海かカスピ海あたりで東西に分かれて、インド移民とルーマニア経由の流浪民になった...んだと、
(2015年1月15日)

<http://85358.diarynote.jp/201501150827243003/>

稚児、去ねる猥然。(違っ

2015年1月15日 [ヒロシマ+ナガサキ<フクシマ=【地球】!!](#)



おはようございます。

08:21です。

最近しばらくぶりに絶好調?です。

音楽はきのうの続きでこのへん聴いてみましょう。

<https://www.youtube.com/watch?v=Y49xhyQxnr8>

現在では、ジプシー民族(ロマ)はインド系だ、...って「ことになってる」けど...

音楽を聴いてる限りでは、あのインド音楽の複雑精妙で独特な音階やリズムとは、まったく関連性がなく、むしろエジプト...というより、ずばりユダヤ音楽に近い。(^^;)

つまるところ、いわゆる「ユダヤ民族の失われた10支族」のうちのひとつが、黒海かカスピ海あたりで東西に分かれて、インド移民とルーマニア経由の流浪民になった...んだと、私は思うん

だけど。

あのあたりの内海周辺の奪ったとられた追い出された...の陣取り合戦／民族移動史って...

さぞかし、おもしろいんだろおなあ...☆

バイトは遅番。

天気は絶好調。

線量低めで、気温は高杉晋作。(^^;)

...歩く。予定です...☆

地震マップ @eq_map

・2時間 2時間前

【M2.6】国後島近海 深さ80.8km 2015/01/15 05:57:12

<http://j.mp/17IB7kK>

地震マップ @eq_map

・4時間 4時間前

【M2.6】津軽海峡 深さ159.4km 2015/01/15 04:20:42

<http://j.mp/1DZRCTV>

地震マップ @eq_map

・6時間 6時間前

【M2.6】浦河南方沖 深さ51.9km 2015/01/15 02:30:18

<http://j.mp/14AenBd>

地震マップ @eq_map

・9時間 9時間前

【M2.9】青森県東方沖 深さ35.3km 2015/01/14 23:44:45

<http://j.mp/1IK2B4G>

地震マップ @eq_map

・11時間 11時間前

【M5.0】TATAR STRAIT, RUSSIA 575.4km 2015/01/14 21:09:35JST, 2015/01/14
12:09:35UTC

(G)<http://j.mp/1B0zKtl>

(USGS)<http://j.mp/1APuIDj>

地震マップ @eq_map

・11時間 11時間前

◆◆緊急地震速報(最終第5報)◆◆ 【M5.5】 サハリン南部付近 深さ600km 2015/01/14

21:09:38発生 最大予測震度不明

<http://j.mp/14z3yPN>

...「みすら」教徒...ッ！！！！ (2018年8月22日)

<http://85358.diarynote.jp/201808220553395393/>

[...「みすら」教徒...ッ！！！！ \(...沙魚...宇宙...w w w\)](#)

2018年8月22日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

<https://www.youtube.com/watch?v=pNpTUD5LNxl>

Celtic Gate (Vol.6) – Into a magical forest | Celtic Music

(承前)。

...「ニュースの途中」でしたが...w (^ ^ ;) w

大脱線ッ☆

↓

=====

OTL49さんがリツイート

北欧の理想と現実 @yasemete · 8月16日

ISISに奴隷として売られた少女がなんとか逃げ出し、ドイツに難民として来たが、

彼女を虐待していた男も難民になっておりドイツでばったり再会。

ドイツ当局に事情を話すと「彼も難民なので何もできない」

彼女は#ドイツ を離れ、今父親とクルドに住んでいる

<https://twitter.com/yasemete/status/1030092185335558147>

↑

北欧の理想と現実 @yasemete · 8月19日

イスラム教徒が難民としてドイツに押し寄せるにつれて、中東や北アフリカでマイノリティだったヤズィーディー教徒やキリスト教徒の難民が元の場所に帰り始めている、というニュース。奴隷だった少女もヤズィーディー派

↑

...おっと！ ネタだ...！ 「夢で視た」やつ...？！

...と、思って思わず検索したら...！

...ピンゴ！ ...「みすら」教徒...ッ！！！！

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A4%E3%82%BA%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC>

>中東のイラク北部などに住むクルド人の一部において信じられている民族宗教。

- >ヤズィーディー教徒の教義は基本的に口承による。
- >ミスラ信仰等のイスラーム化する以前の諸宗教の系譜を引く、クルド人の宗教と言われるが、元来山岳部が信仰の中心ということもあり、未だ明らかにされていない部分も多い。
- >ヤジディ教のシンボルマーク。ミスラ信仰で、太陽を神の象徴としている
- >ヤズィーディーは、信者への改宗を禁じるのと同時に、ヤズィーディーから生まれた者しかヤズィーディーになれないという考えがあるため、他宗教の信者がヤズィーディーに入信することも拒む。
- >周辺のイスラム教徒やキリスト教徒と結婚することも禁じられている。
- >信仰や教義は、地域によって違うものが複数伝わっている[1]。
- >輪廻転生を教義に持ち、イスラムの教義体系からは逸脱が目立つ。
- >バラモン教にも見られるようなカースト的な階級制度を持つ（主要なカーストは三つある[7]）。
- >ほかに、天使マラク・ターウスの伝えられる描写は、ムスリムからすると悪魔シャイターンに重なる部分も多い[5]。そのため、ムスリム（イスラム教徒）から邪教扱いを受けることがあるとされる。
- >過激派組織の1つISILは、ヤズィーディーは多神教であるとし、ジズヤやイスラーム改宗の対象外とするなど、いわゆる啓典の民であるキリスト教徒やイスラム教徒とはその扱いを差別化した。

参照⇒

...クルドだったのか...ッ！！

...w（^◇^；）w...☆彡

...そもそも「実在した」のか...「みとら信仰」...w

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9F%E3%82%B9%E3%83%A9>

ミスラ (Miθra) は、イラン神話に登場する英雄神として西アジアからギリシア・ローマに至る広い範囲で崇められた神。インド神話の神ミトラ (मित्र [mitra]) と起源を同じくする、インド・イラン共通時代にまで遡る古い神格である。その名は本来「契約」を意味する。

イランでのミスラの他、インドのミトラやギリシア・ローマのミトラース (ミトラス) についてもここで説明する。

...かなり「一致」している...

(誓っていうが、

私の学生時代 (1970~80年代) にはインターネットなどなく、周辺の図書館にはここまで詳細な文献はなく、当時はいくら調べても、

「夢で視たミトラの神」についての資料は...手に入らなかった...☆)

参照⇒<http://85358.diarynote.jp/201606151942001570/>

> 「ミトラとは、何なのだろう？」 (1983年)

...はてさて...「物語」の紐(キープ)は、二重螺旋を描いて深化している...www

...う~わ~w 「ほぼ完全に一致」~...!!

↓

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9F%E3%82%B9%E3%83%A9>

インドのミトラ

インド神話では、契約によって結ばれた「盟友」をも意味し、友情・友愛の守護神とされるようになった。

『リグ・ヴェーダ』ではアディティの産んだ十二柱の太陽神(アーディティヤ神群)の一柱で、毎年6月の一カ月間、太陽戦車に乗って天空を駆けるという。

また、同じくアーディティヤ神群の一柱であるヴァルナとは表裏一体を成すとされる。

この場合、ミトラが契約を祝福し、ヴァルナが契約の履行を監視し、契約に背いた者には罰を与えるという。

イランのミスラ

「ミスラ」という語形はインドのミトラに対応するアヴェスター語形で、パフラヴィー一語ではミフル(Mihr)、ソグド語ではミシ(Miši) [2]、バクトリア語でミイロ(Miuro)という。

古くは、インドと同じく契約・約束の神だったが、中世以降は友愛の神、太陽の神という性格を強めた。民間での信仰は盛んで、ミスラを主神とする教団もあった。ミトラ神教という動きもあった。

ゾロアスター教のミスラ

ミスラは司法神であり、光明神であり、闇を打ち払う戦士・軍神であり、牧畜の守護神としても崇められた。

古くはアフラ・マズダーと表裏一体を成す天則の神だったが、ゾロアスター教に於いてはアフラ・マズダーが絶対神とされ、ミスラはヤザタの筆頭神に位置づけられた。このような変化があったものの、「ミトラはアフラ・マズダーと同等」であることが、経典の中に記され、初期の一体性が保存された。

中世の神学では特に司法神としての性格が強調され、千の耳と万の目を以て世界を監視するとされる。また、死後の裁判を司るという。

↑

...「ヴァルナ」さんとか「アフラ・マズダ様」とかって、

...「エルさん」のことかしら...ツ☆

リステラス星圏史略
古資料ファイル
1 - 4
『還るべき者』

<http://p.booklog.jp/book/107611>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107611>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107611>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ